キリスト集会のご案内

Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol.4 | 定価150円(本体143円)

主は、生きておられる

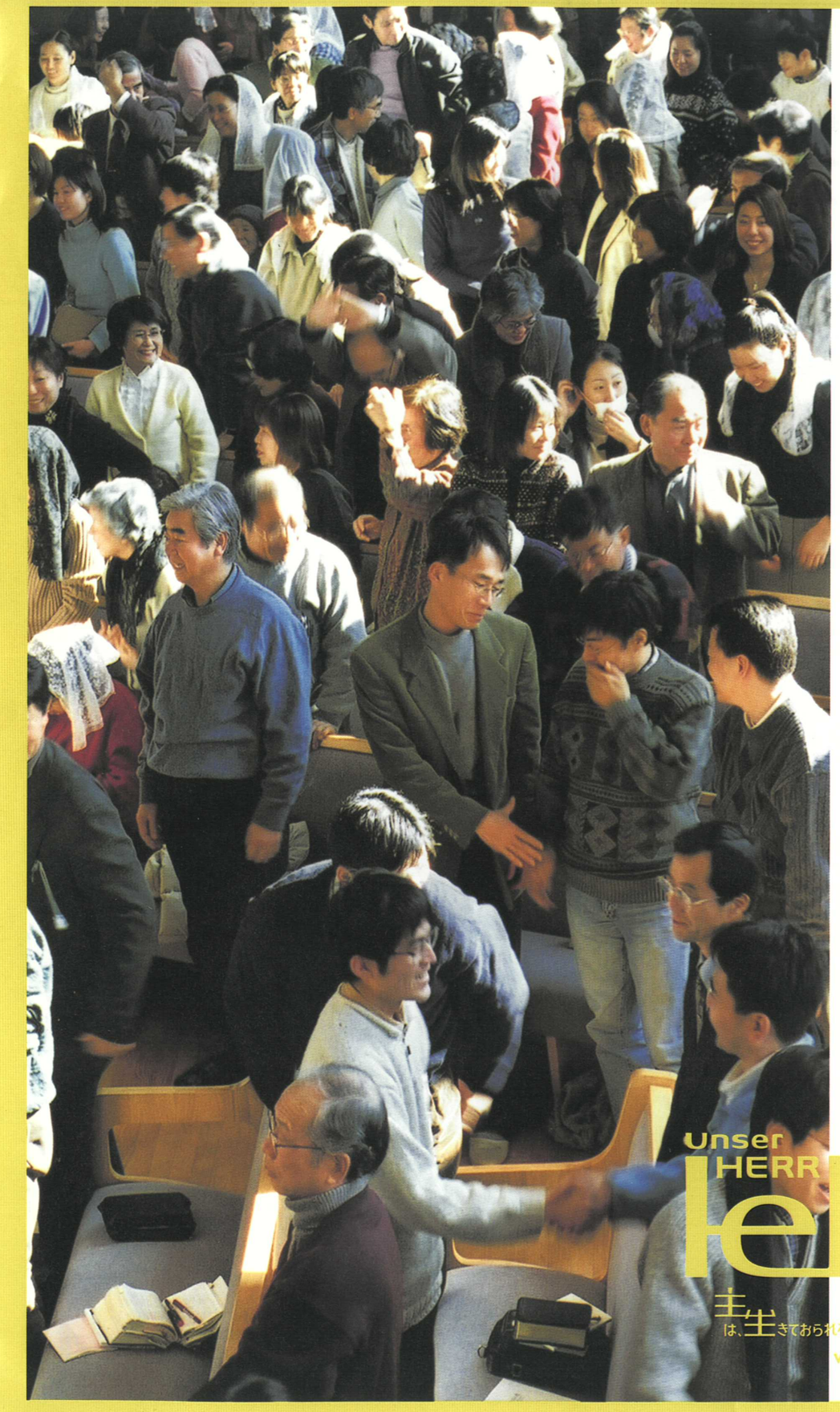
Unser HERR lebt

— 光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。—
(エペソ5·9)

A Gift of His Words



graph magazine 2002 vol.4



Unser HERR lebt

主は、生きておられる vol.4

INDEX

04 巻頭メッセージ
「……神は、ほんとうに言われたのですか？」
ゴットホルド・ベック

06 特集 **みことばのクリスマスプレゼント**

12 連載メッセージ 第4回 ［モーセの十戒］
神の聖なる戒め ゴッドホルド・ベック

4人のメッセージ
18 真理とは何ですか？ 野田 繁
22 神の似姿に変えられる 飽戸 弘
26 いのちの息 白石 光一
28 お父さんお母さんにしたがいましょう 吉田 浩

30 2003年 1月～6月 ［メッセージ当番表］
32 2003年［よろこびの集いスケジュール最新版］
34 ドイツから来られた主にある姉妹の証し

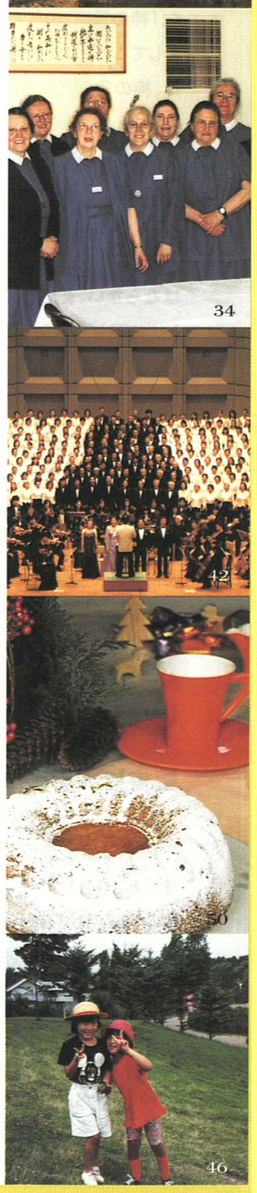
2人の証し
36 ［肝臓癌を与えられて］ 飯島夏樹
40 ［すべての事柄の裏側に、主がいてくださった］ 飯島寛子

42 メサイヤコンサート東京公演［感動呼んだ賛美の響き］

各地の集会から
44 **こちら大阪集会で～す**
45 結婚・葬儀の報告/祈りの課題
46 子どもたちとの触れ合いから あおぞらひろば
48 イエス様が、再び、来てくださる！
50 クリスマスにオランジェンクーヘンを
52 本の紹介／キリスト集会へのご案内
54 全国の集会住所録







「……神は、ほんとうに言われたのですか？」(創世記3・1)

ゴットホルド・ベック

これは、蛇がエバを誘惑する時の言葉です。蛇、つまり悪魔は、神の言葉に疑問符を付けてエバに問い返しました。それだけでなく、「神の言葉」の代わりに、「自分の考えた言葉」を付け加えました。そしてこれが、人間の悩みの始まりとなりました。エバ、つまり人間は、神の言葉だけを信じていればよかったのに、悪魔の言葉を信じたゆえに、堕落して罪人となり、まことの神との正しい関係を失ってしまったのです。主なる神が語られる言葉に恐れを持たず、それに疑問符を付けたり、自分の考えを付け加えたりする者は、知らないうちに悪魔のとりこになってしまいます。聖書はこのことを厳しく戒めています。**「あなたがたに命じることばに、つけ加えてはならない。また、減らしてはならない。(申命記4・2)」、「神のことばに混ぜ物をして売るようなことはせず……(2コリント2・17)」。**私たちは、聖書を読んだり誰かに伝えたりするとき、聖書に書かれてあることだけを厳密に、忠実に受け取り、自分の考えや自説を勝手に持ちこむことを厳につつしまなければなりません。

このことは、イエス様の態度を見るとよくわかります。イエス様ほど、父なる神のみことばを大切になさった方はありません。**「あなたのみことばは真理です。(ヨハネ17・17)」**とあるとおり、イエス様にとって主のみことばはすべてでした。イエス様は、主のみことばなしには何もできなかったのです。**「人はパンだけで生きるのではなく、神の口から出る一つ一つのことばによる。」(マタイ4・4)**。神の口から出る、一つ一つの言葉こそが、つまり、聖書に書かれてある一つ一つの言葉こそが、絶対であり、すべてです。

聖書は人を根本的に変える。多くの体験から。

私のもとには、多くの方々から、聖書やイエス様についてのお手紙や電話が寄せられてきます。そのいずれもが、聖書、イエス様を知った喜びを証ししておられます。最近寄せられたいくつかの例をご紹介しましょう。

名古屋集会の新井稔さんは、病の後天に召された順子夫人の記念会の案内状に、こう書いたのです。「聖書を知らなかったら、順子は悲しみの中で悲運をのろったことでしょう。でも、順子はイエス様を信じて死の恐怖から解放され、私も変わりました。天国でめぐり会える日が楽しみです」。

あるノイローゼの女性の電話から。「救われてほんとによかった。守られているから安心です。聖書を読むと元気になり、感謝しています」。

盛岡集会の深沢門太さんの証し。「聖書は弱い人が読むものだ、私は稼いでうんと遊ぼう、と考えていました。今は、聖書は一番面白い本です。いくら読んでも、もういい、ということがない。いくらでも繰り返し読みたい。すごい本です」。

ある方が家族の方に「本をとってくれ」と言ったら、それは決まって聖書のことでした。「聖書は本の中の本です。比べる物のない、すばらしい宝物です」。

キリスト集会では、毎年、まだイエス様をご存じない方々を大勢招いて、ヘンデルのメサイアを演奏しています。そこで聖書のみことばを考えながら演奏を聞くと、メサイア(救い主)であるイエス様を信じ、礼拝せざるをえなくなります。今年は渋谷のオーチャード・ホールで2000人が聴きました。その中の一人の女性が、メールをくださいました。「私は何度もメサイアを聴いてきましたが、今回初めて、イエス様そのものに直接出会いました。イエス様が私のために来てくださったことや、私がイエス様を死なせたのだということが、はっきりわかったのです。私が叩き続けていた扉はとっくに開いていたのです。そして、イエス様は私の中に住まってくださる、そのように語りかけられたように感じました。とても衝撃的でした。それを告げてくれたのは、歌われていた聖書の言葉でした。」

これらの証しは、たくさんの中のごく一部にすぎません。しかし、共通しているのは、「聖書のみことばがすべて」であり、「聖書は根本的に人を変える」ということです。

絶対的な権威を持った神のみことば、聖書。

私たちは、聖書に書かれてあることを「絶対的な神のみことば」として受け入れなければなりません。それに耳を傾けない者は、生き生きとした信仰を、決して持つことはできません。聖書のみことばを読む場合、本当の目標は、イエス様に出会い、イエス様を体験的に知り、イエス様を受け入れること、イエス様をよりよく知ることであるべきです。限られた自分の理解力で聖書を理解しよ



うとしても、うまくいきません。イエス様が地上におられた時代の聖書学者たちは、そのような読み方をしました。ですから、イエス様は、そんな彼らにきびしく言われたのです。

「あなたがたは、聖書の中に永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。その聖書が、わたし(イエス様)について証言しているのです。それなのに、あなたがたは、いのちを得るためにわたしのもとに来ようとはしません。」(ヨハネ5・39, 40)

イエス様ご自身が、大切なのは聖書を調べることではなく、「いのちを得るためにわたしのもとに来ること」だと言われています。これこそが、聖書を読むことの意味であり、目的です。聖書が語っているのは、「イエス様ご自身」のことです。イエス様は、「聖書がわたしについて証言している」と言われました。また、**「わたしのことばは決して滅びることがありません。(マタイ24・35)」**とも約束してくださいました。聖書を読むことと、いのちを得ることは、一つの事柄であり、決して二つのものではありません。モーセはみことばについて、**「これは、あなたがたにとって、むなしいことばではなく、あなたがたのいのちであるからだ。(申命記32・47)」**と言っています。

主なる神の息が吹きこまれることによって書かれた聖書

聖書はすべて、主なる神の息が吹きこまれることによって書かれたものです。主なる神の息吹により、霊感により、感動によって書かれた書物です。ですから聖書は、「主の教え」というよりも、「主なる神の啓示」です。主は、みことばをもって、ご自身を現わしておられます。主のみことばは、私たちにとって、いのちのパンです。なぜなら聖書は、教理や真理の原則を語っているのではなく、いのちのパンそのものであるからです。主ご自身もまた、私たちがそれによって生きる「いのちのパン」になりたいと思っておられます。私たちは「心の食べ物」をどこで見つけるのでしょうか。聖書の中に見つけるのです。聖書は主イエス様を啓示します。そしてイエス様こそが、私たちにとって、「いのちの糧」なのです。

愛するキリスト集会のみなさん。毎日みことばを読みましょう！

日々必要なみことばを集めた「日々の光」という本を、飢え渇きをもって読みましょう！　みことばを読んで、考えて、心に留めましょう！　イエス様を信じた者が経験する難しい問題のほとんどは、「みことばに頼らない」ことによって起こります。みことばを読まない怠慢という罪を、主に告白しましょう！　もし、飢え渇きをもって聖書に接しなければ、みことばを深く味わわなければ、霊的に一歩も前進しなくても不思議ではありません。主のみこころにかなったダビデは、次のように告白しています。

どんなにか私は、あなたのみおしえを愛していることでしょう。これが一日中、私の思いとなっています。(詩篇119・97)

最後に、聖書から2箇所を引用して終わります。

イエスは答えられた。「だれでもわたしを愛する人は、わたしのことばを守ります。そうすれば、わたしの父はその人を愛し、わたしたちはその人のところに来て、その人とともに住みます。」(ヨハネ14・23)

草は枯れ、花はしぼむ。だが、私たちの神のことばは永遠に立つ。(イザヤ40・8)

みことばのクリスマスプレゼント

Merry Christmas!

今年もクリスマスの季節を迎えました。
イエス様のお誕生を祝うこの時期、
世間ではプレゼントの交換が広く行われますが、
多くのキリスト者は品物よりも、
クリスマスカードで「みことば」を贈ります。
みことばを通してイエス様を喜びたい、感謝したい、
イエス様の愛を伝えたい、という願いからです。
みことばが真理であり、日々の歩みの道しるべとなることを、
体験的に知っているためでもありましょう。
みことばのすべてはまことです。(詩篇119・160)
あなたのみことばは、私の足のともしび、
私の道の光りです。(詩篇119・105)と聖書は言っています。
キリスト集会に集う多くの方々も、
みことばによって平安を得た、勇気を与えられた、
目を開かれたなど、さまざまな恵みを体験しています。
それらの証しを添えたみことばの数々を、
聖書のエッセンスとも言える
みことばと合わせて、
クリスマスプレゼントとしてお届けしましょう。

神は、実に、
そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。
それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、
永遠のいのちを持つためです。
(ヨハネ　3・16)

初めに、神が天と地を創造した。
(創世記1・1)

13年前、初めて聖書を手にして、この冒頭のみことばを目にしたとき、一種の衝撃を受けました。この神こそ本当の神だと直感し、聖書は真理の書だと信じることができました。何故だか分かりませんが、子どもの頃から抱いていた疑問、地球はどうしてできたのか？人間は？太陽は？という疑問が、まるで霧が晴れるように一挙になくなり、創世記を一気に読んでしまいました。(NS)

「主の山の上には備えがある。」
(創世記22・14)

仕事で厳しい状況に追い込まれて苦しんでいた一年前、追い打ちをかけるように、頼りにしていた方々が相次いで亡くなりました。私は、喪失感と自分の無力さを思い知らされて頭の中が真っ白になり、明日を想像することができませんでした。私の手元から皆が消え去り、もう何もない、主よあなた様しか私にはないのです、と祈ったとき、まったく予期せぬ方法で道が開かれていました。すべてを失ったときに主だけが残されたという事実、状況がどうあれ主の山の上には必ず備えがあるという約束は、私に生きる力を与えてくださいました。(KT)

その子の母親は言った。「主は生きておられ、あなたのたましいも生きています。私は決してあなたを離しません。」
(2列王記　4・30)

私どもに初孫(男児)が与えられたのは、ほぼ5年前のことでした。しかし彼は生後直ぐに原因不明の病にかかり、病院を二つも転院しずっと留め置かれました。約2ヶ月後のある夏の朝、このシュネムの女に与えられた子の記事に出会いました。夢中で読みました。エリシャの祈りによって、一度死んだこの子が生き返るのを知り、思わずひれ伏し主に感謝しました。その日の午後、孫は無事家に帰され母親の胸に抱かれました。5歳の彼はいま元気に育っています。(AM)

幸いなことよ。そのそむきを赦され、罪をおおわれた人は。幸いなことよ。主が、咎をお認めにならない人、心に欺きのないその人は。
(詩篇32・1,2)

私が洗礼を受けたときいただいた、このみことばは、それから30年たった今日に至るまでつねに信仰の支えになっております。わがままで傲慢な、そのことさえ気づかずにいた者に、「あなたは罪人です」と聖書のメッセージを通して主は迫られました。そして「罪の報酬は死」であり、神の裁きの後永遠の滅びに入れられることを知ったとき、肩に重い石を乗せられた思いでした。でも、その罪を贖うためにイエス様がこの世に来られ、イエス様の犠牲の死によって罪が赦されていることも知り、素直に神の前にお詫びしました。(Tu)

主のすばらしさを味わい、これを見つめよ。幸いなことよ。彼に身を避ける者は。
(詩篇34・8)

自分自身や、自分の置かれている状況を見るとき、漠然とした不安を覚えます。しかし、このみことばをいただき、主が私になしてくださった救いのみわざや、日々備えてくださる恵みを思ったとき、私の心は主の前に静まり、平安に満たされました。自分の目を主に向ける決意をすることが、主の祝福の中を歩む秘訣なのだ、と銘記させられたみことばです。(Ha)

私は、愚かで、わきまえもなく、あなたの前で獣のようでした。
(詩篇 73・22)

43年前の学生時代に与えられたみことばです。当時、せつな的な生活を送っていた私は、まさしく獣そのもので、神から遠く離れた存在でした。創造主なる神は、ご自分の形に似せて人を造られ、ご自分との交わりのできる唯一の存在として人を地上に置かれたのに、獣の生き方しかできないとは何と神のご意思に反する者か、とはっきり示されました。そのとき以来、みことばの恵みにあずかる者とされてきました。(HM)

「わたし(主)は、彼の肩から重荷を取り除き、彼の手を荷かごから離してやった。」
(詩篇81・6)

このみことばは、ずっと前にある人のために祈って与えられたものですが、昨年のクリスマスの集いでプレゼントされて再会し、そのときはっきり、主が自分のために与えてくださったみことばだ、と確信できました。というのも、私は仕事が偶像のようになっていたからです。仕事がうまくいかないと不安になってしまうのです。主はこのことをよくご存知で、「わたしが心配してあげるから任せなさい」「安心していなさい」と語ってくださいました。いつも心に留めておきたいみことばです。(K)

私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。私の助けは、天地を造られた主から来る。
(詩篇121・1、2)

生まれたときから、私の周りにはいつも山があり、その美しさ、雄大さ、静けさは私を惹きつけてやまず、郷里を離れると、アルプスの少女ハイジのように、ひたすら山を恋い慕ったものでした。でも、長い苦しい旅の果てに、山ではなく、山を造られた尊いお方を慕うときがまいりました。それは、心の奥に光りがさしこみ、みことばがいのちの泉となって内側からあふれ出したときでした。山は以前にも増して美しく思えます。山を仰ぎ見ると、主への感謝と賛美の思いがわき上がるのです。(U)



A Gift of His Words

愛する家族の余命があと数ヶ月と知らされ、「なぜ」という思いで胸が張り裂けそうな日々を過ごしていました。そして、悲しくてたまらない気持ちになったとき、いつも思い出していたのがこのことばです。
―私達には仰ぐべき存在がある、助けを求める私達に主の方から来てくださる、主にすべてをお任せしよう―こう思うと気持ちがやわらぐのでした。つらい数ヶ月でしたが、主を信じて生きていける恵みを存分にいただきました。(H)

主は私にかかわるすべてのことを、成し遂げてくださいます。(詩篇138・8)

かつて自分がとてもちっぽけで、ひどくみじめな存在に感じ、「私なんか生きてる価値がない」とまで思い込んでしまったとき、このみことばに出会い、ハッとさせられました。私にかかわるすべてのことを成し遂げてくださる、と主が言っておられるのに、それを信じない自分の不信仰を思い知らされたのです。そして、私は無力であっても、主にゆだねれば、主が私を通してみこころを成し遂げてくださるのだ、と思えたら、元気が出てきました。イエス様は、私のような者をも、ご自身の命と引き換えに買い戻してくださり、「高価で尊い」と言ってくださっています。主の大きな愛と恵みに感謝するばかりです。(Ku)

神である主、イスラエルの聖なる方は、こう仰せられる。「立ち返って静かにすれば、あなたがたは救われ、落ち着いて、信頼すれば、あなたがたは力を得る。」
(イザヤ30・15)

かつて父が肺がんで入退院を繰り返していたとき、遠くに住んでいた私は父に何もしてやることができず、心が落ち着きませんでした。そのとき、このみことばが与えられ、イエス様の前に静まり、イエス様が働いてくださることを願い求め、信頼して祈り続けました。そして、平安が得られただけでなく、父の救い(イエス様への信仰)という大きな恵みまでいただきました。(YT)

「あなたがたがしらがになっても、わたし(主)は背負う。わたしはそうしてきたのだ。なお、わたしは運ぼう。わたしは背負って、救い出そう。」
(イザヤ46・4)

主は、ずっと、背負ってきてくださったのです。そして、なお、背負って救い出そう、と語りかけてくださいます。ああ、このお方以外に、私は何を望みましょう。(TS)

「子どもたちを、わたし(イエス様)のところに来させなさい。止めてはいけません。神の国は、このような者たちのものです」
(マルコ10・14)

主イエス様を信じて20年になりますが、過去に一度だけキリスト集会を離れたことがあります。家族だけで主を礼拝し、信仰を守れると思い込んでいたのです。しかし現実は、何をやっても心に安らぎがなく、いつしか家族の間でも心が通じ合わなくなってしまいました。そんなとき、子ども(3人)から「日曜学校へ行きたい」という声が出て、ハッとさせられ、このみことばが心に浮かんできました。自分の不従順のせいで、子どもたちを主から遠ざけていた大きな罪を示され、へりくだろうと決心したとき、スムーズに集会に戻ることができ、平安と喜びをいただきました。主イエス様の忍耐と十字架の完全な赦し、そして、ずっと祈ってくださっていた集会の方々の愛を心から感謝しました。(KK)

空の鳥を見なさい。種蒔きもせず、刈り入れもせず、倉に納めることもしません。けれども、あなたがたの天の父がこれを養っていてくださるのです。
(マタイ6・26)

私は人間関係の苦しみからキリスト集会に集い始めたのですが、そのころ好きだったみことばです。まだイエス様を確信していなかった私にとって、人間関係で苦しむことのない鳥が、うらやましく思えてなりませんでした。何で人間だけがこんなに苦しまなければならないのか？世の中、間違ってないか？つまり、問題は自分にあるのではなく、自分の外にあるのだ、と本気に思っていました。
ところが、イエス様が十字架上でお示しくださった愛によって心の目が開かれ、私は本当に罪人であり、わがままそのものであることを示されました。問題は私の心の内側にあったのです。鳥をも愛し日々支え、生かしておられる主イエス様は、私たち人間をこよなく愛しておられます。苦しみも主イエス様を知るために備えられたものでした。イエス様の愛を知ったとき、私の苦しみは感謝と喜びに変えられたのです。そして今は、一日一日を懸命に生きている鳥たちの姿に、純粋な信仰を見る思いがします。好きだったみことばの味わいも、ますますと変えられました。(YN)

見よ。わたし(主)は新しい事をする。今、もうそれが起ころうとしている。
(イザヤ43・19)

それまで病気らしい病気をしたことがなかった母が突然、脳こうそくで倒れました。自分の名前さえ思い出せず、会話もほとんどできない母を、ポロポロ涙を流しながら看病していたとき、このみことばが目に留まって、急に喜びが湧き上がってきました。そして、イエス様はこれからどんなことをしてくださるのだろうか、と期待で胸がいっぱいになったのです。(T)

彼(イエス様)は痛めつけられた。彼は苦しんだが、口を開かない。ほふり場に引かれて行く小羊のように、毛を刈る者の前で黙っている雌羊のように、彼は口を開かない。
(イザヤ53・7)

地方の小さな主の群れの中で、かつて孤立無援の戦いに身を置くことを余儀なくさせられるという、幼い信仰者にとって最もつらい試練を与えられたときでした。眠られぬ夜に主に呼ばわり、苦しみのうちに一人床を抜け出し、孤独に涙しなければならぬほどに追い詰められていたと思っていたそのとき、このみことばを通して、主は御自身の孤独、峻厳、求めるところの崇高さ、存在の聖潔、それら主のご栄光の一端を、幼い信仰者にも垣間見る恵みをお与えくださいました。(A)

あの方(イエス様)は盛んになり私は衰えなければなりません。
(ヨハネ3・30)

15年前イエス様に出会い救われたとき、福音集会のメッセージで知ったみことばです。
そのときは、イエス様は盛んになり私も盛んになる、というのなら分かるけれども、どうして私が衰えなければならないのか、と不思議で意外でした。でも、信仰の歩みの中で、救いの道がイエス様の十字架ただ一つであるように、信仰を全うする道も「イエス様は盛んになり私は衰えなければなりません」という道一本しかない、ということを知るようになりました。なかなかできないことですが、天国に行くまで忘れられないみことばになりました。(NK)

「平安があなたがたにあるように。」
(ヨハネ20・19)

私はイエス様を信じ救われてからもなお、主から目を離すと平安をなくします。自分の足りなさばかり見つめて落ち込んだり、あるいは人間同士の理解の限界に悲しんだりするのです。そんなとき、私はひとりでそっと主に心の扉を開きます。「イエス様」と小さな声で呼ぶだけで、いつも主は答えてくださいます。「わたしは知っているよ、あなたの悩みを。もうあなたの罪は赦されているよ、十字架で。平安があなたにあるように」と。その声を聞くと、私の心は落ち着き、温かくなり、感謝と喜びでいっぱいになります。そして、前を向いて歩み始めるのです。(Ki)

A Gift of His Words

口で告白して救われるのです。
（ローマ10･10）

長い間自分は信仰を持っていると思っていたのに、救われているかどうか分からない。喜びもない。それならどうしたら救われるのか分からない、と心の中で行ったり来たりする日々の中で出会ったみことばです。心の中で信じるだけでは不十分だとわかり、その思いを口に出して神様の前に正直に告白したときに、天の窓が大きく開かれました。単純な行為ですが、告白する勇気が全能者の力を認め、同時に神様の前に自分を低くすることであることも発見しました。その後の生活においても、口に出して告白することが平安を与えられるための不思議な手段であることを、神様は教えてくださっています。(TT)

神は真実であり、その方のお召しによって、あなたがたは神の御子、私たちの主イエス・キリストとの交わりに入れられました。　（1コリント1･9）

イエスを信じたいと思い、でも「信じきれる」かどうか、自信のなかった私にとって決定的であったみことばです。私が「信じきれる」かどうかではなく、真実な神ご自身が私を召してくださっていると思ったとき、これからの残りの人生の歩みをお委ねしようという安心がわき上がってきました。そのとき以来、今に至るまで、このみことばとおり主は真実を尽くしてくださっています。(N)

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。
（1コリント 10･13）

6年前、車の大事故を起こしたとき、心の支えとなったみことばです。車は大破、同乗の妻は頸椎損傷で寝たきりとなり、大学に勤務しながら週末ごとの通院宿泊介護、ぶつけた7台の車の所有者との補償交渉、痴呆の義母の問題（退所と入所）、2日にわたった現場検証とそれに続く検察庁での取り調べなど、精神的、肉体的、経済的負担に押しつぶされそうになりました。そのとき、このみことばが与えられて「耐えられるんだ」と確信でき、くじけずにすべての問題を処理できたのです。信仰を持っていてよかったと、つくづく感じました。翌年3月の卒業式では、この聖句を刷り込んだ栞（しおり）を、所属学科の卒業生全員に贈りました。(Y)

終わりのラッパとともに、たちまち、一瞬のうちにです。ラッパが鳴ると、死者は朽ちないものによみがえり、私たちは変えられるのです。朽ちるものは、必ず朽ちないものを着なければならず、死ぬものは、必ず不死を着なければならないからです。　（1コリント15･52、53）

このみことばはヘンデル作曲オラトリオ「メサイア」の第48曲の歌詞に引用されていますが、「メサイア」の賛美を通して、天国の宮に朽ちないものとして入れる確信をいただけたことは、大きな喜びでした。天国でイエス様にお会いできること、天国に先に凱旋された親族や友人に再会できることを楽しみに、これからも地上での賛美を歌い続けます。(NN)

御霊（みたま）の実は、…柔和です。
（ガラテヤ5･22、23）

これは今年、私の心に持続する喜びをくださったみことばです。私は聖書の言葉をギリシャ語で調べる癖があるのですが、「柔和」と日本語訳された元の言葉（ギリシャ語でプラウテース）の意味は、柔和、穏和、やさしさ、やさしい心、すなおさ、と辞書にありました。そして、最後の「すなおさ」にハッとしました。イエス様に導かれて最初にいただいたのは、「すなお」にしてくださる御霊の業だった、と思い出したからです。私のような者でも、自分の罪に目を向けてすなおに「ごめんなさい」と言うことができるのは、御霊の働きのおかげだと感謝しています。(OH)

いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。そべての事について、感謝しなさい。
（1テサロニケ5･16～18）

私が聖書を読み出してすぐに見つけた、すてきなみことばです。こんなこと、できない！と思いましたが、イエス様はいつのまにか、少しずつ私を変えてくださっているようです。不思議に、何かあると、このみことばが心に浮かんできます。(HS)

そこで、わが子よ。キリスト･イエスにある恵みによって強くなりなさい。
（2テモテ2･1）

このみことばは、キリスト者すべてに、永遠の父と呼ばれる主なる神、イエス様が「わが子よ」と呼んで与えてくださったものです。もう10年以上も前になりますが、アルコール依存症の母親が2人の子どもと共に受洗した時、洗礼式で2人のために私が祈った祈りのみことばでもあります。今は社会人となっているこの兄弟は、成長の折々に、アルコール依存症の母親を「尊敬する」と証言してきました。まさに「キリスト･イエスにある恵みによって強く」された者の証しです。キリスト･イエスにあって強くなるとは、自分の弱さを知ることであり、他者の弱さも自分のこととして受け入れることであります。結果として主の前にへりくだり、人の前に謙遜になります。苦しみ悲しみの種であった母を「尊敬する」と言う2人の断言こそ、みことばの証しそのものです。(S)

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」　訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。
（ヘブル12･5～7）

信仰を持ってまもないころ、まだ「罪」というものが分からずにいた私は、自分の思うままに進んでいましたが、その結末はみじめでつらいものでした。ふと開いた聖書のこの箇所は、まさしく天の父からの呼びかけでした。たとえ自分がみじめで情けなくてどうしようもない者であったとしても、主は「わが子よ」と呼んでくださる。この大きな愛に感謝しかありませんでした。そして、つらい状況も、主が愛する故に与えてくださった訓練、と受け取ることができました。(TA)

成長時、きびしい両親に辛い叱責をよく受けて、愛されている実感を持てず、いつも不安を抱いていました。ストレスに弱い人間になり、勤務先の対人関係のトラブルと病気が重なったとき、重圧に押しつぶされそうになりました。そのときキリスト集会に導かれて、このみことばに出会い、主の愛のむちを理解して、身も心も包まれるような安心感に涙があふれるのを止めることができませんでした。(To)

自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。
（1ペテロ2･24）

こんなにひどい、こんなにとるにも足りない私なのに、主なる神のひとり子イエス様が「ご自分から」十字架について、いのちを捨てて私の罪を赦してくださった！　救ってくださった！　と思うだけで胸がふるえます。イエス様の愛のまなざしの、なんとお優しいことでしょう。救われてあることの、なんとすばらしいことでしょう！(CS)

心の貧しい者は幸いです。天の御国はその人のものだからです。
（マタイ5･3）

私どもが結婚の指輪に刻んだみことばです。当時あまりよく分からずに二人で選んだ聖句でしたが、それから30年後の今、しみじみとこのみことばの真実なることを味わっています。自分の思いにしたがって愚かなことをたくさんしてきましたが、はじめから心貧しくして主イエス様との交わりを豊かにするのが最善であった、との実感を深めています。これまでの30年は結局このみことばがいかに真実であるかを体験的に知らされるためのものでした。(MK)

神の聖なる戒め

ゴットホルド・ベック

［モーセの十戒］4

1それから神はこれらのことばを、ことごとく告げて仰せられた。
2「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。
3あなたには、わたしのほかに、ほかの神々があってはならない。
4あなたは、自分のために、偶像を造ってはならない。上の天にあるものでも、下の地にあるものでも、地の下の水の中にあるものでも、どんな形をも造ってはならない。
5それらを拝んではならない。それらに仕えてはならない。あなたの神、主であるわたしは、ねたむ神、わたしを憎む者には、父の咎を子に報い、三代、四代にまで及ぼし、
6わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。
7あなたは、あなたの神、主の御名を、みだりに唱えてはならない。主は、御名をみだりに唱える者を、罰せずにはおかない。
8安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。
9六日間、働いて、あなたのすべての仕事をしなければならない。
10しかし七日目は、あなたの神、主の安息である。あなたはどんな仕事もしてはならない。—あなたも、あなたの息子、娘、それにあなたの男奴隷や女奴隷、家畜、また、あなたの町囲みの中にいる在留異国人も。—
11それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された。
12あなたの父と母を敬え。あなたの神、主が与えようとしておられる地で、あなたの齢が長くなるためである。
13殺してはならない。
14姦淫してはならない。
15盗んではならない。
16あなたの隣人に対し、偽りの証言をしてはならない。
17あなたの隣人の家を欲しがってはならない。すなわち隣人の妻、あるいは、その男奴隷、女奴隷、牛、ろば、すべてあなたの隣人のものを、欲しがってはならない。」（出エジプト 20・1～17）

これまで私たちは「信者に対する」律法の意味として4つのポイントについて考えてきました。

1　神の賜物として与えられる義
2　神の戒めを喜ぶキリスト者
3　十戒を守ろうとするキリスト者の敗北
4　御霊の実としてのみこころの実行

です。今回は、4番目のポイント「御霊の実としてのみこころの実行」の続きです。

モーセの十戒は、聖霊を通して与えられました。そして聖霊の目的とするところは、私たちの日常生活を通して神の戒めを実行することです。聖霊はすべてのことができるお方です。主なる神は私たちに聖霊を与えてくださいました。ですから主は、聖霊に満たされた生活を、私たちに要求することができるのです。

聖霊が臨在しておられるところには、聖霊の性質が現われてきます。

聖霊が働いてくださるところには、御霊の実が現われてきます。

聖霊が支配しておられるところには、罪の支配からの自由があります。

聖霊が働いておられるところには、力が満ちます。

聖霊が行なわれるところには、いのちがあります。

ひとことでいえば、聖霊から出てくる生活、聖霊による生活、そして聖霊に従った生活は、聖霊の性質の現われです。それはちょうどぶどうの実の中に、ぶどうの木の性質が現われ、りんごの中にりんごの木の性質が現われてくるのと同じです。

神の御霊に導かれる人は、だれでも神の子どもです。（ローマ　8・14）

しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。（ガラテヤ　5・22、23）

光の結ぶ実は、あらゆる善意と正義と真実なのです。（エペソ　5・9）

以上の聖書の箇所によって、私たちは、御霊の実を正しく知ることができましたが、モーセの十戒も同じように、神のみこころを現わすものです。

聖霊の働きによって主に頼る者は、神の戒めを守る者となります。いわゆる十戒はもはや単なる要求ではなく、自発的に現われてくるイエス様のいのちの結果です。

ぶどうの木にとって実を結ぶことは、決して外からの要求や戦いではなく、その内側から出てくる自然の現われなのです。

私たちも、御霊の働きに従うなら御霊の実を結ぶことができますが、自分勝手な自我に従うなら肉の働きを生じるだけです。御霊の実と肉の働きとの間には、何という大きな違いがあることでしょうか。

肉の行ないは明白であって、次のようなものです。不品行、汚れ、好色、偶像礼拝、魔術、敵意、争い、そねみ、憤り、党派心、分裂、分派、ねたみ、酩酊、遊興、そういった類のものです。前にもあらかじめ言ったように、私は今もあなたがたにあらかじめ言っておきます。こんなことをしている者たちが神の国を相続することはありません。しかし、御霊の実は、愛、喜び、平安、寛容、親切、善意、誠実、柔和、自制です。このようなものを禁ずる律法はありません。（ガラテヤ　5・19～23）

私たちの日常生活にとって、もっとも大切な命令は次のとおりです。

御霊によって歩みなさい。そうすれば、決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。（ガラテヤ　5・16）

聖霊の力によって、モーセの十戒はまったく新しい光に照らされ、御霊によって実行することが可能となるのです。イエス・キリストは、十戒を聖なる神のみこころとして弟子たちに示され、主もまたご自身の戒めである戒律の実行を、弟子たちに要求なさいました。

「もしあなたがたがわたしを愛するなら、あなたがたはわたしの戒めを守るはずです。」（ヨハネ　14・15）

「もし、あなたがたがわたしの戒めを守るなら、あなたがたはわたしの愛にとどまるのです。」（ヨハネ　15・10）

私たちとイエス様との関係は、主の戒めをどのように守るかによって決められます。私たちは昼も夜も主の戒めを思い、主の愛を覚え、真剣に考え、それを愛すべきではないでしょうか。

パウロは、エペソの信者たちに家庭生活のあり方を示そうとしたとき、十戒のうちの五番目の戒めを引用し、わかりやすく次のように説明しました。

子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。（エペソ　6・1、2）

これは、主に喜ばれる生活とは主の戒めを実行することである、ということを示しています。戒めを守ることは主に対する愛の証明であり、主の家族に属していることの証拠です。

もし、私たちが神の命令を守るなら、それによって、私たちは神を知っていることがわかります。神を知っていると言いながら、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。しかし、みことばを守っている者なら、その人のうちには、確かに神の愛が全うされているのです。それによって、私たちが神のうちにいることがわかります。神のうちにとどまっていると言う者は、自分でもキリストが歩まれたように歩まなければなりません。愛する者たち。私はあなたがたに新しい命令を書いているのではありません。むしろ、これはあなたがたが初めから持っていた古い命令です。その古い命令とは、あなたがたがすでに聞いている、みことばのことです。しかし、私は新しい命令としてあなたがたに書き送ります。これはキリストにおいて真理であり、あなたがたにとっても真理です。なぜなら、やみが消え去り、まことの光がすでに輝いているからです。光の中にいると言いながら、兄弟を憎んでいる者は、今もなお

やみの中にいるのです。兄弟を愛する者は、光の中にとどまり、つまずくことがありません。兄弟を憎む者は、やみの中におり、やみの中を歩んでいるのであって、自分がどこへ行くのか知らないのです。やみが彼の目を見えなくしたからです。

(Iヨハネ　2･3～11)

神を愛するとは、神の命令を守ることです。その命令は重荷とはなりません。

(Iヨハネ　5･3)

このように、神のみこころであるモーセの十戒は大切なものであり、私たちの日常生活を通してもはっきりと現われなければなりません。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。

(IIコリント　3･18)

現在私たちは、この地上でまだ主のご栄光を反映させている者とは言えず、そのことは私たちの大きな悩みと苦しみになっています。しかし将来、主は私たちを完全な栄光のうちに変えてくださり、しみも汚れもない者として、父なる神の御前に立たせてくださるのです。

今は神は、御子の肉のからだにおいて、しかもその死によって、あなたがたをご自分と和解させてくださいました。それはあなたがたを、聖く、傷なく、非難されるところのない者として御前に立たせてくださるためでした。　(コロサイ　1･22)

イエス様を通して、父なる神のみこころが完全に現われたように、私たちの場合もまた、同じようになさるのです。主に仕える者たちを通して、主の聖なる戒めは「実行された現実」として現わされるのです。

もはや、のろわれるものは何もない。神と小羊との御座が都の中にあって、そのしもべたちは神に仕え、神の御顔を仰ぎ見る。また、彼らの額には神の名がついている。

(黙示録　22･3､4)

ですから、私たちはこの地上にいる限り、その生活の中に、聖い恐れと崇拝をもって、モーセの十戒を主のみこころの現われとして覚えましょう。そして、聖書の一番最後に記されている**「見よ。わたしはすぐに来る。この書の預言のことばを堅く守る者は、幸いである。」(黙示録22･7)**というみことばが、私たちの完成のための神の戒めの意味を持っている、ということもいっしょに覚えましょう。

「私は、この書の預言のことばを聞くすべての者にあかしする。もし、これにつけ加える者があれば、神はこの書に書いてある災害をその人に加えられる。また、この預言の書のことばを少しでも取り除く者があれば、神は、この書に書いてあるいのちの木と聖なる都から、その人の受ける分を取り除かれる。」　(黙示録　22･18～19)

それでは、次にモーセの十戒について詳しく学ぶ前に、手始めとしてその概略を見てみることにしましょう。

「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」

(出エジプト　20･2)

モーセの十戒は、私たちにとって大いなる宝物です。なぜならそれは、主なる神ご自身によって与えられたものだからです。主なる神は、二つの石の板の上にご自身の指でもって十のことばを書き記されました。そしてイスラエルの民が偶像崇拝をしたことに対して、モーセが怒ってその板を打ち砕いたとき、主はモーセが持ってきた新しい板の上に、再び十の戒めをお書きになったのです。

これは、主ご自身がお書きになったただ一つのものです。ですからモーセの十戒は、神にとってきわめて重大かつ神聖なものです。

したがって私たちは、モーセの十戒を、私たちに対する主の特別な言葉として、恐れとおののきをもって読む必要があります。

こうして主は、シナイ山でモーセと語り終えられたとき、あかしの板二枚、すなわち、神の指で書かれた石の板をモーセに授けられた。　(出エジプト　31･18)

主はモーセに仰せられた。「前のと同じような二枚の石の板を、切り取れ。わたしは、あなたが砕いたこの前の石の板にあったあのことばを、その石の板の上に書きしるそう。」　(出エジプト　34･1)

彼(主)は石の板に契約のことば、十のことばを書きしるした。　(出エジプト　34･28)

このようにして主はただ単に石の板の上に、戒めを書いてくださっただけでなく、すべての人間の心に主の戒めを刻み込んでくださいました。主は、あなたの心にも十戒を書きしるしてくださいました。あなたは、たとえまだ一度も聖書を通して十戒を読んだことがなかったとしても、必ずそれを知っているはずです。何が正しく、何が正しくないか、また、何が善で、何が悪であるかということは、私たちの心の中に深く刻まれているはずです。人間に与えられている良心は、十戒を肯定し、それが無条件に神聖で完全で良いものであることを認めています。

私たちのうち誰一人として、この十戒を人生の基準として子孫に伝えることをためらう者はいないでしょう。私たちはみな、十戒こそが政府や行政機関の土台となってほしいと願うでしょう。しかし神ご自身が書いてくださった十の言葉、モーセの十戒は、今日では人々の生活や、国民全体の生活の大切な基準として真剣に考えられることは、きわめてまれなことになってしまっています。

モーセの十戒が、無条件に大切な基準とされていたなら、私たちの考えや行動の基本ははるかに明確なものとなっていたことでしょう。そして私たちが、聖霊が私たちを形造ってくださろうとしておられる姿を見たいと、切に望んだなら、私たちすべての者の内におられる聖霊の働きは、より深いものとなったことでしょう。

私たちは、確かに主なしには何もできません。しかしそれと同じように主もまた、私たちなしには何もしたいと思われません。主は、私たちとともに働くことによって、みわざを現わしたいと望んでおられるのです。

どんなにすばらしい考えと天才的な能力を持っている偉大な芸術家といえども、材料がなければどうすることもできません。それと同じように、主は、材料であり器である私たちを用いたいと思っておられるのです。

主の目的は、イエス様を通して、またモーセの十戒を通して、明らかにされています。主がどういう人間を望んでおられるかは、イエス様と十戒を見ればわかります。ですから大切なことは、ただ単にモーセの十戒を知るだけでなく、私たちを通して「具体的、現実的な形」を造り出すことです。モーセの十戒では、**「わたしは、あなたをエジプトの国、奴隷の家から連れ出した、あなたの神、主である。」(出エジプト20･2)**と記されている前書きが大変重要です。この主のみことばは、単なる言葉ではなく、主の啓示です。主の啓示は全体の土台であり、この啓示がなければ、十戒は正しく知ることができず、無意味な言葉となってしまいます。「わたしは、あなたの神、主である。」このように主はご自身を啓示してくださったのです。

このみことばの語り手は人間ではなく、生けるまことの神です。そして生けるまことの神はご自身が造られた人間に、神の戒めをお与えになる権利を持っておられます。主は大切な教えを人間にお与えになる前に、ご自身を啓示してくだったのです。このことは、私たち人間がまず最初に神を知り、主なる神の前に黙って立つことが大切であることを示しています。なぜなら、語られた言葉よりも、その言葉を語っておられる方が誰であるかが、はるかに重要だからです。

「わたしは、主である。」というみことばの中の「主」という名前は別のところに、**「わたしは、『わたしはある。』という者である。」(出エジプト3･14)**と記されています。このお名前の中に、深い意味が示されています。「主」ということばの原語は、三つのヘブライ語の動詞から構成されています。その動詞は、まず第一に「主はいました」、第二は「主はいます」、第三は「主はいますであろう」という、過去、現在、未来の三つの時制を表しています。

モーセに現われた神のお名前こそ、旧約聖書全体における神の啓示そのものです。

神はモーセに仰せられた。「わたしは、『わたしはある。』という者である。」また仰せられた。「あなたはイスラエル人にこう告げなければならない。『わたしはあるという方が、私をあなたがたのところに遣わされた。』と。」　(出エジプト　3･14)

新約聖書で啓示されている主のお名前は、これとまったく同じです。

神である主、常にいまし、昔いまし、後に来られる方、万物の支配者がこう言われる。「わたしはアルファであり、オメガである。」

(黙示録　1･8)

私たちが主の戒めについて考えたいと思うと、主はすでに、「わたしは、主である。」と言われて私たちの前にお立ちになります。私たちの理性は主の偉大さをつかむことができませんし、また理解することもできません。主は永遠から永遠にわたって、無限の過去から無限の未来にわたって、永遠のお方です。主は、「わたしはある。」と言うことがおできになります。ですから、主は今も他のいかなる権威とは比べものにならない最高のお方として、存在しておられるのです。主はまことに「すべてのすべて」であられ、あらゆるものの上に君臨しておられます。「わたしは、主である。」と主は言われます。ですから主だけが、最高の権威をもって、何が正しいか何が正しくないかをお決めになることができるのです。人間は万物の尺度ではありません。また、世論が決定的な意味を持つのでもありません。多くの人々が語ることが大切なのではなく、「わたしは、主である。」と仰せになるまことの主だけが大切です。

しかし、主のお名前にはもっとすばらしい意味があるのです。「主」という名前のなかには、同時に「救い」ということばが含まれており、さらにイエス様、つまり贖い主、救い主ということばが含まれているのです。すなわち十戒が与えられる前に、すでに主なる神は、救いを与えようと決めておられたのです。実際にイエス様がこの地上に来られたとき、イエス様は、「わたしがそれです。」「わたしはいるのです。」「わたしは…です。」とおっしゃいました。これは十戒のなかに書かれていた言葉を、そのままイエス様がお使いになったからです。

ヨハネによる福音書の特徴の一つは、**「あなたと話しているこのわたしがそれです。」(ヨハネ4･26)**、**「まことに、まことに、あなたがたに告げます。アブラハムが生まれる前から、わたしはいるのです。」(ヨハネ8･58)**、**「わたしは、世の光です。わたしに従う者は、決してやみの中を歩むことがなく、いのちの光を持つのです。」(ヨハネ8･12)**というイエス様のみことばにありますが、それはモーセの十戒がイエス様を通してはっきりとした形をとったことを意味しています。

罪を罰しようとする「引き抜かれた剣」ではなく、救いを与え、助けを与える主の「御手」こそが、律法の石の板を刻まれたのです。そして私たちは石の板に刻まれた神の意志の最初の啓示を、はっきりと知ることができるのです。

「わたし、このわたしが、主であって、わたしのほかに救い主はいない。」

(イザヤ　43･11)

ここで明らかなことは、「主」と「救い主」とは同じ方だということです。このお方だけが、罪を赦し、死から解放してくださることができます。つまり、律法をお与えになった方は、同時に恵みを与えるお方です。ですから十戒を通して、実は希望の光が私たちに与えられました。また、ただ単に「神」ではなく、「あなたの神」と言われることは何とすばらしいことでしょうか。

創世記1章1節に、「神」という同じ名前が出てきます。この名前(ヘブライ語Elohim)を通して、もっとも強く最高の創造主が、ご自身を明らかに表わされています。

創造主であるお方は、天と地をお造りになっただけでなく、私たち人間をもお造りになりました。ですからこの方こそ、私たち人間の生活を決定し、命令し、禁止することがおできになるお方です。

「あなたの神」という啓示、呼びかけによって、偉大な主は私たちに近づいてくださり、私たちの生活領域に入ってくださり、私たちの人

生を支配してくださろうとしておられるのです。

主なる神は、「あなたの神」という啓示によって、まず最初にご自身をアブラハムに現わされました。

「次のことが、わたしとあなたがたと、またあなたの後のあなたの子孫との間で、あなたがたが守るべきわたしの契約である。」
（創世記　17・10）

「わたしは、わたしの契約を、わたしとあなたとの間に、そしてあなたの後のあなたの子孫との間に、代々にわたる永遠の契約として立てる。わたしがあなたの神、あなたの後の子孫の神となるためである。」
（創世記　17・7）

「あなたの神」という表現は、主なる神とイスラエルの民との契約、それも永遠の契約を意味しています。主なる神は御子イエス・キリストが流された血潮に基づいて、私たちと契約を新たに結んでくださいました。血潮によって贖われた者は永遠に主なる神の所有物であり、したがって永遠の安全を保障されているのです。

主なる神がイスラエルの民に与えられた約束は、次の通りです。

「それらの日の後、わたしが、イスラエルの家と結ぶ契約は、これであると、主が言われる。わたしは、わたしの律法を彼らの思いの中に入れ、彼らの心に書きつける。わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる。」　**（ヘブル　8・10）**

貴い血潮によって、あなたと契約を結んでくださった「あなたの神」は、あなたの生活のすべてを支配する権利を持っておられます。ですからあなたにとって大切なことは、神の聖なるみこころは何であるかを知ることです。あなたは、みことばの光に対して心を開くとまったく新しい者に造り変えられます。

すでに一度、自分の生活を主なる神に明け渡した人でも、その後、自分勝手な生き方をしてしまうことは少なくありません。こういう人々の主に対する信仰は、単なる飾り物であって、実際はそれが日常生活や仕事と密接に結びついていないのです。こういう人々はまた、自我に基づいて自分が良いと思ったこと、動機が良ければそれで良いと思い込んで、行動してしまいます。イスラエルの歴史の暗黒時代は、そのような状態に陥った時代でした。

そのころ、イスラエルには王がなく、めいめいが自分の目に正しいと見えることを行なっていた。　**（士師記　21・25）**

「どうしても不幸になりたい」と思う人は、「自分の目に正しい」と見えることを行なえば不幸になります。

多くの混乱は、この世だけでなく、キリスト者の生活の中にも存在しています。その混乱とは、無政府状態みたいなものです。実際に当時のイスラエルには王もなく政府もなかったので、めいめいが自分勝手なことをして、ばらばらになってしまったのです。「わたしは、あなたの神、主である。」という言葉は、そのような無政府的な生活状態の中に、さしこむ稲妻の一撃です。破滅的な生活は、稲妻の一撃によってきよめられる必要があります。生活の土台がきよめられる時に、初めて正しい生活の構築が可能となるのです。

多くの信者は、新しい再出発を願い、困難な状態から抜け出すことを切望し、自分の将来に対する神のみこころを尋ね求めます。しかし彼らは、自分の過去を整理清算してはいないのです。ただ過去のことを覆い隠したり、忘れ去ろうとすることに一生懸命で、神の戒めに照らしてみようとはしません。

明るみにさらされない罪は私たちの内面的な生活にとって、病気の巣窟のようなものです。そしてそこから、破壊的な影響が出てきます。多くの信者は過去の罪を弁明したり、覆い隠そうとしたり、忘れ去ろうとすることに全力を使って頑張りますが、それは決して成功することはありません。その結果は、まことの自由も得られず、生き生きとした証しをすることもできないのです。

本当に過去から解放され、自由になるためには、ただ一つの道だけがあります。自分の罪を主の前に言い表わし、罪の赦しのために流された主イエス様の血潮を感謝して受け取ることです。

私たちには主なる神の声を聞こうとする用意があるのでしょうか。正直になろうとは思いませんか。私たちが、すべてを明るみに出し、全生涯を主に明け渡そうとしないなら、主は主のみこころを私たちに語ることはできません。つまり、自分を正当化したり、弁明したりすることをやめなければ、すべては無駄となります。

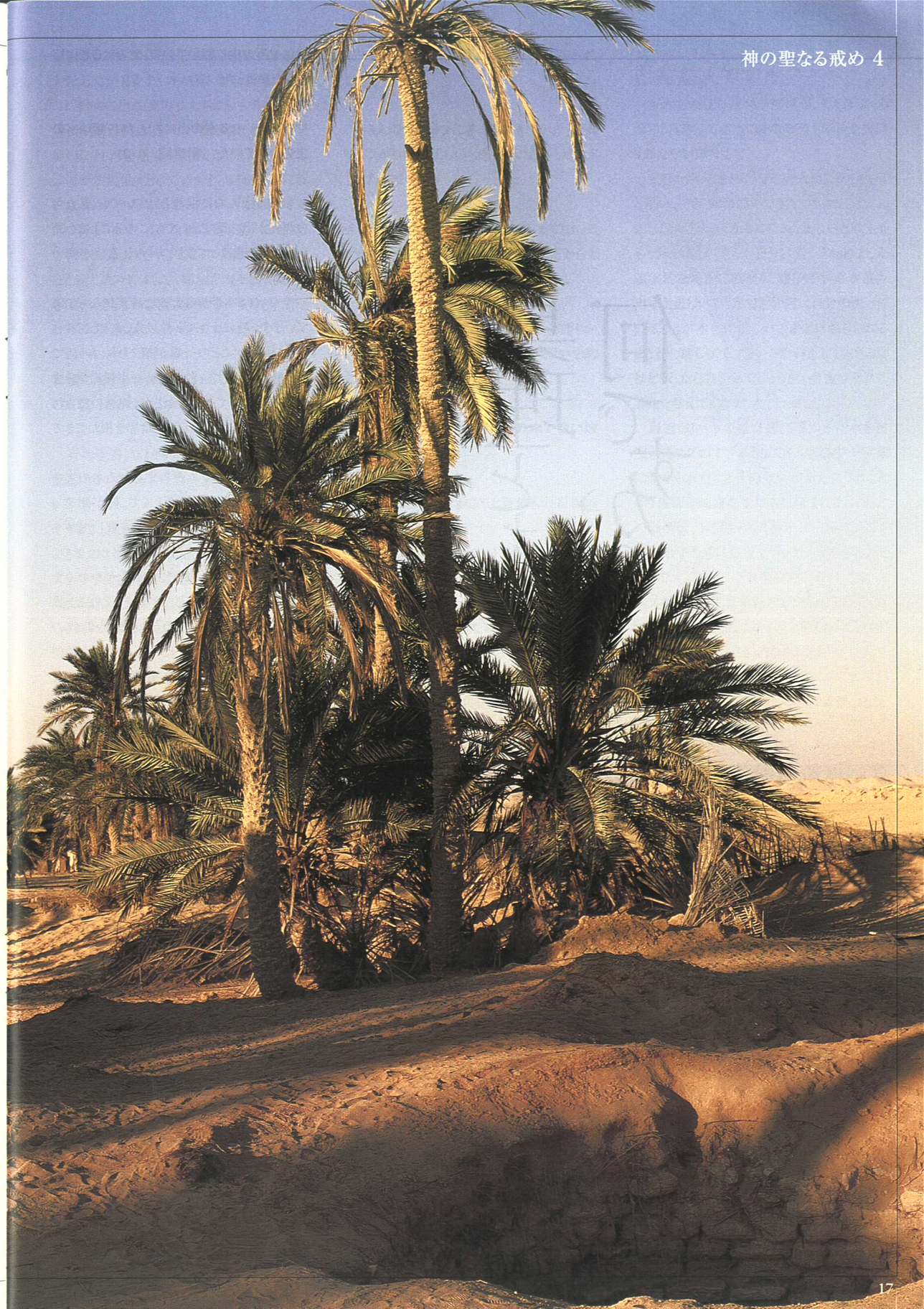
イエス様は、罪のゆえに人間を退けるということは一度もなさいませんでした。むしろ自分の罪を隠そうとしたり、自己正当化しようとしたりする者に対して、驚くべきほど厳しく「忌わしいものだ。」とおっしゃったのです。うわべだけつくろう見せかけの行ないこそ、主にもっとも忌み嫌われる偽善であり、傲慢です。

「忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは、杯や皿の外側はきよめるが、その中は強奪と放縦でいっぱいです。目の見えぬパリサイ人たち。まず、杯の内側をきよめなさい。そうすれば、外側もきよくなります。忌わしいものだ。偽善の律法学者、パリサイ人たち。あなたがたは白く塗った墓のようなものです。墓はその外側は美しく見えても、内側は、死人の骨や、あらゆる汚れたものがいっぱいなように、あなたがたも、外側は人に正しいと見えても、内側は偽善と不法でいっぱいです。」
（マタイ　23・25～28）

ダビデの心の態度は、私たちにも必要です。彼は次のように祈りました。

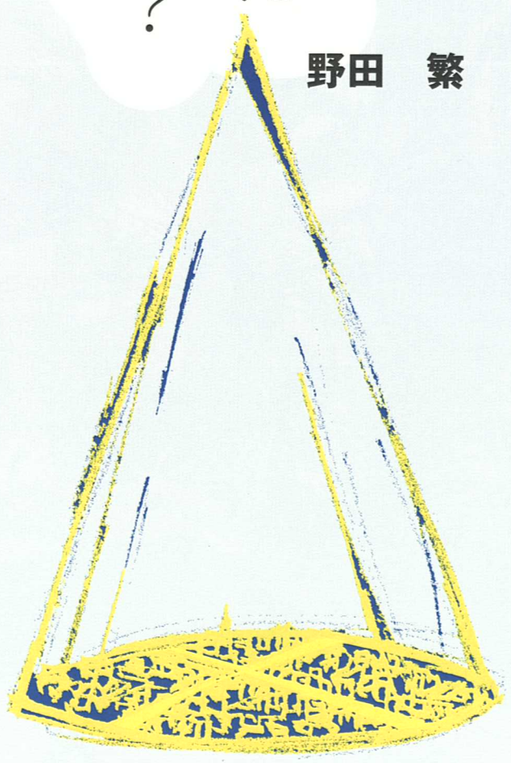
神よ。私を探り、私の心を知ってください。私を調べ、私の思い煩いを知ってください。私のうちに傷のついた道があるか、ないかを見て、私をとこしえの道に導いてください。
（詩篇　139・23、24）

けれども、明るみに引き出されるものは、みな、光によって明らかにされます。明らかにされたものはみな、光だからです。それで、こう言われています。「眠っている人よ。目をさませ。死者の中から起き上がれ。そうすれば、キリストが、あなたを照らされる。」
（エペソ　5・13、14）



真理とは何ですか？

野田　繁



光はやみの中に輝いている。やみはこれに打ち勝たなかった。（ヨハネ　1･5）

やみが大いなる水の上にあり、神の霊は水の上を動いていた。（創世記　1･2）

世界がどんなに混沌としていても、私たちの周囲が真っ暗であっても、このみことばを聞くとき、私たちはとても力づけられ希望が湧いてきます。

今や、日本も世界も大変な時代になって来ています。特にオウム事件以来、人としてやってはいけないことの一線が超えられ、もう何でもありの世相です。私たちが一生懸命働きながら追い求めてきた豊かさが、神様の創られた調和のとれた素晴らしい世界を損ねてきているのも悲しい事実です。

一人の人間アダムが善悪を知る木の実を食べてから、人は何が正しくて、何が間違っているのか分からないまま右往左往し、ますますそれがひどくなってきている感じがします。主なる神を恐れない「夜」の時代が今なのでしょうか。人は本当のことが見えなくなると誰でも不安になります。けれども、こんな時代の中にあっても、神のことばである聖書の呼びかけに耳を傾けるとき、不思議な平安に包まれてきます。この平安は、真理のお方、主イエス様を信頼して歩む者に与えられる恵みです。

真理とは何ですか？

以前、ある友人に聖書の話をしていたら「真理なんてそんなに簡単に分かってたまるものですか！」と言って憤然とされたことがあります。私たちは日常、よく「自分の考えは正しい」とか「あの人は正しい」とか「この人は間違っているよ」ということを言います。もちろん、それなりに正しさはあるでしょうが、聖書は、人間が自分の正しさを追い求めてきた結果、いつも混乱という「つけ」がまわってきたことを伝えようとしています。イエス様を十字架刑に処したピラトのことは、今の私たちにも示唆を与えます。聖書を見ると、当時の権力者であり裁く立場のピラトが卑屈で、逆に捕えられたイエス様の方が実に堂々としています。何を根拠に裁けばよいのか分からないピラトの狼狽ぶりが目に留まります。イエス様は何も悪いことはしていなかったのです。でもイエス様が生きていたら困る人々によって、罪状を次々と作り上げられていきました。そんな中で、ピラトの前に出されたイエス様ははっきり言われたのです。

真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。（ヨハネ　18･37）

新約聖書にはその預言の実現したことが記されています。

そうして、彼らはイエスの顔につばきをかけ、こぶしでなぐりつけ、また、他の者たちは、イエスを平手で打って、こう言った。「当ててみろ。キリスト。あなたを打ったのはだれか。」（マタイ　26･67、68）

しかし、これに対して「真理とは何ですか？」とピラトがイエス様に問い返す、このやりとりには深く考えさせられるのではないでしょうか。どちらが正しくどちらが間違っているかは明らかであり、どちらが自由でどちらが不自由であるかも歴然としています。ピラトは真理であるイエス様が分かりませんでした。結局は、ユダヤ人たちに「**私は、あの人には罪を認めません**」（**ヨハネ18･38**）と言ったピラトですが、イエス様の処刑を許可してしまったのです。

また、旧約聖書ヨブ記の主人公は、「**潔白で正しく、神を恐れ、悪から遠ざかっていた**」（**ヨブ1･1**）と言われるような人物でしたが、やはり気になるところがあります。聖書にこう書かれています。

この3人の者はヨブに答えるのをやめた。それはヨブが自分は正しいと思っていたからである。（ヨブ　32･1）

彼がヨブに向かって怒りを燃やしたのは、ヨブが神よりもむしろ自分自身を義としたからである。（ヨブ　32･2）

このヨブはその後、様々な神様からの語りかけを経験し、「自分が正しい」という思いを捨てて解放されました。

私は自分をさげすみ、ちりと灰の中で悔い改めます。（ヨブ　42･6）

そしてヨブは、以前よりも数倍もの祝福の中で半生を送ったのです。

私たちは学校で知識を学び教養を育んできました。しかし、知識をもつことは大切なことであっても、知識の豊かさが人間を必ずしも正しい方向へ導くものではないことに気づかされています。聖書の中にも、豊かな宗教知識をもった熱心な宗教家パリサイ人やサドカイ人が登場しますが、知識を前面に出してとても意地悪な質問をしています。私たちが大なり小なりやってきていることです。人間はどうしてこんなに意地悪くなるのか、と考えてしまいます。彼らにとって宗教知識というものが役に立つどころか人をいじめて追いこむ道具にすらなっています。単なる知識は心の飢え渇きを満たすものでもありません。では、真の知識とはどんなものでしょうか、ソロモンが書いています。

主を恐れることは知識の初めである。（箴言　1･7）

正しい人とはどんな人ですか？

私たちの住む社会が混沌としてくればくるほど「真理って本当にあるの？」と素朴な質問をしたくなります。

私も小さいときから「正しい人間になりたい」と思い、一生懸命励んできたつもりでした。しかし段々と大きくなるにつれ、正しいと考えてもそれが実行できない自分に気づき始めました。現実的な場面に直面し、面子や利害が絡み出すと正しいことができないし、自分の思っていることが本当に正しいのかと揺さぶられることがしばしばです。いったい正しく生きるにはどうしたら良いのでしょうか。聖書はそれに答えを与えてくれました。

最近、ヨハネの福音書13章から18章を何度も読んだのです。そしてイエス様が十字架にかかられたことへの思いが新たにされ、大きな感謝と厳粛な気持ちに包まれました。この個所は、3年間イエス様がご一緒に過ごされた弟子たちに最後のメッセージをされたところです。これこそ聖書の呼びかけです。イエス様に信頼して歩む者がいつも希望をもって生きられるのは、このイエス様のみことばがあってこそであり、きょうもイエス様が一人一人のために祈って下さるがゆえに守られているのだ、と確信します。ここで心に留まったことを三点まとめてみます。

1.主を無条件に信頼して生きる必要性

聖書は「見えるもの」に頼らないで「見えないもの」に信頼してゆく生き方を伝え続けています。創世記を見ると、アブラハムは啓示によって生まれ故郷を離れ、未知の地に出発したときから、主なる神の大きな恵みを体験し始めました。私たちが何かこの世の目に見えるものに頼っている時は、主は働くことが出来な

真理に属する者はみな、わたしの声に聞き従います。（ヨハネ　18･37）

い、働きようがないのです。次のペテロの証しには力づけられます。

あなたがたはイエス・キリストを見たことはないけれども愛しており、いま見てはいないけれども信じており、ことばに尽くすことのできない、栄えに満ちた喜びにおどっています。
（1ペテロ　1･8）

イエス様は地上におられる間、多くの奇蹟を起こし、数々の良い行ないをされました。弟子たちはそれを見て感動し、イエス様に喜んでついて行きました。しかしイエス様は、ご自分がおられなくなってから初めて弟子たちが主を真剣に知るようになるだろう、ということを知っておられました。そこで、ご自分のあとから助け主として聖霊を遣わすことを約束なさいました。目に見える世界には限界があることと「何が一番大切か」について話しておかれました。

私たちも主を信頼して歩み出すと、自分の大事にしてきたことや、持っている大切なものを捨てさせられるときがあります。それは、主がご覧になってその人に必要ないからであり、見えないものに信頼して歩み始める「入口」となります。

マルコの福音書10章17節から22節に書かれているある青年は、自分が握っている大切なものから離れることができなかったために、主に従っていくことができませんでした。主のことばを聞き、喜びのない表情でイエス様のところを去った、とあります。

すると彼は、このことばに顔を曇らせ、悲しみながら立ち去った。なぜなら、この人は多くの財産を持っていたからである。
（マルコ　10･22）

私は5年前に55歳の定年を迎え、そのとき声をかけて下さった今の新しい職場に移りました。職場を変わってすぐ、強度の脳梗塞に襲われました。重症でした。新しい仕事に燃えての再出発だっただけに、何が何だかわからないまま数日が過ぎました。しかし、「すべて主から受け取って行こう」という思いになったとき、目には見えないけれども生きて働いて下さる主が近くにおられるのをはっきり覚えることができました。

時折、悩みの中にある人々の、この病気が治ったら信じよう、とか、この困難を乗り切れるのなら信じよう、という声を聞きますが、主は、まず私たちが主に信頼して歩みはじめるのを忍耐をもって待っておられます。私たちが主のみ前にへり下ったその時から、主は最善の働きを現わしてくださり、私たちの必要を満たしてくださるのです。

2.ゆるされる必要性

聖書は、なぜ、一つも罪を犯さなかった聖い方、イエス様が死ななければならなかったのかを伝えています。そして、罪を悔い改め、イエス･キリストが十字架の上で流された血によって贖われ聖められた者に、生きて働く聖霊が注がれることを約束しています。

キリストも一度罪のために死なれました。正しい方が悪い人々の身代わりとなったのです。それは、肉においては死に渡され、霊においては生かされて、私たちを神のみもとに導くためでした。（1ペテロ　3･18）

イエス様は「**わたしが去って行くことは、あなたがたにとって益なのです。･･･わたしは助け主をあなたがたのところに遣わします。**」（**ヨハネ16･7**）と言われました。聖霊は聖い方であり十字架の贖いを通って初めて与えられます。十字架を信じて赦された人への約束でしょう。ですから、「自分は正しい」とか「見えないから信じません」と固辞すると聖霊に働いてもらえません。私たちはイエス様の十字架の贖いゆえに赦され、聖霊を受けるにふさわしい者にしていただけるのです。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。
（詩篇　34･18）

3.主の聖さ、正しさに心を留め続ける必要性

私たちが自らの正しさで進むと必然的に衝突が起こります。そして聖書は人間の内側からは決して正しさが出てこない、と述べています。

義人はいない。ひとりもいない。
（ローマ　3･10）

この地上には、善を行ない、罪を犯さない正しい人はひとりもいないから。
（伝道者　7･20）

私たちは「自分の思うこと考えることは本当に正しいのだろうか」と、いつも一歩さがって主のみ前にへりくだることが大切です。主の前に謙遜になったとき、聖霊の働きがあります。もし正しさがあるとしたら、その人が心から悔い改め、主を愛することを通して、恵みによって備えられるものでしょう。ですから、いつも大きいことや目立つことをするのが大事なのではなく、毎日の生活が主を愛する方向に向いているかどうかが問われると思います。

最近、ある政治家の秘書が逮捕されたとき、その政治家が「自分は悪いことをしていると言う認識で政治をやってきたことはない」と言ったのを新聞記事で読み、とても驚き、深いむなしさを感じました。人のあるべき姿は、まず主の前に謙虚に立つことであります。そうしなければ私達の内側にある罪を巧妙に利用しようとする働きが、あちらこちらに現れてきます。

あなたが正しく行なっていないのなら、罪は戸口で待ち伏せして、あなたを恋い慕っている。
（創世記　4･7）

あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。（1ペテロ　5･8）

「従う」という訓練も、正しさを学んでゆく道ではないかと思います。主人や責任者が何かを決めたら、それなりに理由があって決めたのですから、その内容に従うべきです。そうすれば、その従う過程で、主は、何が正しいのかを分かりやすく表してくださるでしょう。

ウォッチマンニーの証しで、「私は苦しいとき、困難なとき、人には相談しなかった･･･」とあるのを読んだことがあります。分からないとき、私たちが主に叫ぶ声を主は待っておられます。何年か前にある男性信者の方が話された「私たちって、どんなに正しいと思ってやっていても、神様からご覧になったら実にピントはずれなことをしているのでしょうネ。主の忍耐に本当に感謝です」という言葉をふと思い出します。

正しい人とはどんなかたちで表されるのでしょうか。改めて聖書を読み続けると、正しい人というのは、「主の十字架の赦しによって新しい命が流れこんだ人」であることが分かります。つまり、自らを正しいとする心を放棄した人です。聖書によれば正しい人には次のような特徴があります。

①正しい人にはいつも主を喜ぶ心があります
正しい者たち。主にあって、喜び、楽しめ。すべて心の直ぐな人たちよ。喜びの声をあげよ。
（詩篇　32･11）

人が主を喜ぶと主は喜んでくださり、その主の喜びがつなげられて人に流れてきます。パウロは自らの弱さに気づいたとき、イエス･キリストが近くにおられ共に歩んでくださることを完全に受け取ることができました。牢の中で書かれた「ピリピ人への手紙」は喜びの書簡とも言われ、パウロが抱いていた主への熱い思いが伝わってきます。

誰でも主に出会うまでは主を賛美したり主を喜ぶ心はありませんが、主に信頼し主に目を留め続けると、主がその人を変えてくださり主に似るものにしてくださいます。

②正しい人には自由があります
主は御霊です。そして、主の御霊のあるところには自由があります。
（2コリント　3･17）

今の時代ほど「自由」という言葉が曲がって受け取られている時代はないでしょう。「人間らしく自由に生きてゆこう」という心は自己中心主義的な生き方へと向かわざるを得ず、人に迷惑をかけたり、人間の尊厳を踏みにじってしまう行為にまで進んでしまうものです。

しかし、聖書の述べる自由は「罪の重荷から解放された自由」であり、主を恐れ主に対し責任をもった生き方が伴っているものです。正直な考え方や、人間として失ってはいけない態度を守る生き方は、正しい信仰を通して備えられるものであり、本当の自由は十字架を通してのみ得られるものです。

キリストは、自由を得させるために、私たちを解放してくださいました。（ガラテヤ　5･1）

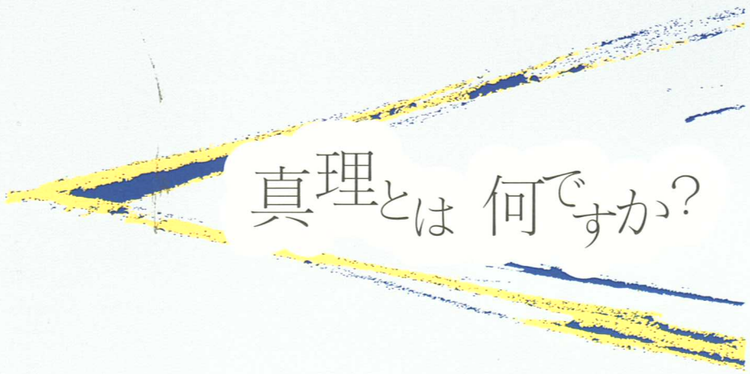
③正しい人は主によって護られます
主の目は正しい者に向き、その耳は彼らの叫びに傾けられる。（詩篇　34･15）

ひとりの正しい者の持つわずかなものは、多くの悪者の豊かさにまさる。なぜなら、悪者の腕は折られるが、主は正しい者をささえられるからだ。（詩篇　37･16,17）

今の時代は混乱と混迷の中にあり、一人一人が自らの正しさを主張しあってグチャグチャになってしまいました。何も信用できない、だれも信頼できない、だったら自分の生き方で歩まざるをえない、政治も文化も、そして身近な人間関係もそんな中にはまり込んでいます。けれども、なにはともあれ「イエス様が真理そのもの」と受け取って進みはじめると、必ず新しい展開が待っています。正直言って私は毎日が「何が正しいのか」、「主イエス様はこのことを喜ばれるのか」と迷いながらの日々です。妙にぎこちなくてスッキリしない日もあれば、自然に喜べる日もあります。でも一番大切なのはいつも主とつなげられていること。そのことで、物質的なことで得られる満足以上にすばらしい内側の満たしが備えられるのです。

わたしにとどまりなさい。わたしも、あなたがたの中にとどまります。枝がぶどうの木についていなければ、枝だけでは実を結ぶことができません。同様にあなたがたも、わたしにとどまっていなければ、実を結ぶことはできません。わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です。人がわたしにとどまり、わたしもその人の中にとどまっているなら、そういう人は多くの実を結びます。
（ヨハネ　15･4,5）

人が正しさをあらわすことのできるのは、主とつなげられているときのみです。この不安定な時代にあって、私たちの前に最も信頼できる「みことば」（聖書）が与えられているのは何と感謝なことでしょうか。





野田繁
略歴／（株）ニュー･ディメンジョン･リサーチ取締役。明治中、明治高、明治大学商学部卒。（株）第一実業入社、その後退社して現職に。

主は心の打ち砕かれた者の近くにおられ、たましいの砕かれた者を救われる。（詩篇　34･18）



神の似姿に変えられる

飽戸　弘

よく未信者の友人から「要するに信仰をもつとは、クリスチャンになるとは、どういうことなの?」と聞かれます。あまり大きな問題なので答えに窮していますが、最近はこう答えることにしています。「信仰を持つとは、キリスト者になるとは、神様が人間をお創りになったとき、人間に、どんな生き方をして欲しいと思われたか、神様がいま、人間に望んでおられる生き方とはどんなものなのか、それを最優先して考え、そういう生き方をしようと決心すること、だと思う」と。

万物の創造主、神。空の星々を創られ、大海原を創られ、地上のすべての動物、植物を創られ、そして最後に人間をお創りになり、地球の管理をおゆだねになった、万物の創造主、神が、人間にどんな生き方をして欲しいと考えておられるか、そのことをまず考えて生きる。地上の法律や、慣習や、世間の目より、われらの創造主のお考えを優先して生きて行こうとする、それがキリスト者だ、と言うことができるのではないでしょうか?
それはちょうど子供が、自分を産んでくれた親の期待に添うように、親に喜ばれるように生きたい、と思うのと同じくらい、自然なことではないでしょうか。

そして神様が、私たち人間をどんなに愛しておられ、私たちのことをいつも見守ってくださっているか、そしてどんな生き方をして欲しいと考えておられるかが、詳しく書かれているのが「聖書」なのです。きょうはそのような沢山の聖書の記事の中から、神様が私たちに語っておられる一つの約束を取り上げ、みなさんとご一緒に学んでみたいと思います。

聖書にはたくさんのグッド・ニュースが語られています。なかでもすばらしいニュースは、次のみことばです。私たちキリスト者は、神様を信じた者は、みな、神様、イエス様と、同じみ姿に変えられて行く、というものです。私のような者も、神様と同じみ姿に変えられるとは、実に驚くべきことです。しかしこれが神様の約束です。

私たちはみな、顔のおおいを取りのけられて、鏡のように主の栄光を反映させながら、栄光から栄光へと、主と同じかたちに姿を変えられて行きます。これはまさに、御霊なる主の働きによるのです。(2コリント　3･18)

立派な信仰を持った者だけ作り変えてくださる、とは書いてありません。良いことをしたら作り変えてくださる、とも書いてありません。そうではなく、“私たちは「みな」、主と同じかたちに姿を変えられて行く”とあります。みな、とあるのですから、あなたも、私も、みな、主と同じ姿に変えられて行くのです。私のようなわがままで、自分のことしか考えない、信仰の歩みも本当に遅い者も、主は、みな、すべて、主と同じみ姿に作り変えてくださる。これが聖書の約束です。神様の約束です。信じがたいことですが、これこそが主の愛であることが分かります。

神様を、イエス様を、信じさえすれば、優等生も、劣等性も、みな、心から愛して下さり、主と同じみ姿に変えてくださる、この主のすばらしいご計画について、きょうは聖書からともに学んでみたいと思います。

宝を土の器の中に

私たちを作り変えてくださる第1の方法は、主の「宝を、土の器の中に入れている」(2コリント　4･7)ことによってです。私たちの性格、人間性は、そう簡単に変わるものではありません。信仰を持ったから昨日までの悪人がきょうから急に善人になる、などということはありません。神様は、私たちの「土の器の中に宝を入れて」くださる、という方法で、私たちを変えてくださる、というのです。

私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。
(2コリント　4･7)

“土の器”とは、この肉体、肉の思いです。自分のことしか考えない、わがままで、どうしようもない、この私の生まれながらの性質、肉、これが土の器です。

“宝“とは、神の与えたもうもの、みことば、聖霊、そしてイエス様ご自身です。

私たちは信仰を持っても、なかなかこの土の器そのものは変わらないものです。このどうしようもない土の器に、イエス様ご自身が入ってきてくださり、イエス様ご自身が私たちの中に住んでくださり、働いてくださり、私たちを主の器として用いてくださる。こうして私たちは変えられて行くのです。

私たちは信仰を持って大分変わった、ということは確かに体験します。大酒呑みがあまり飲まなくなった。タバコも吸わなくなった、カラオケにもあまり行かなくなった。釣り気違いが釣りに行かなくなった、などなど。しかしこれは、自分の力で、自分の努力で、そうなったわけではないのです。気がついてみたらそうなっていた、というのがほとんどの人の実体験です。自分の力、自分の努力で、決してできないことを、気がついてみると、している。これは神様がそうしてくださった以外に考えられません。私たちの中に住んでくださる聖霊が、主ご自身が、働いてくださり、気がついてみたら、酒が要らなくなっていた。タバコも要らなくなっていた。3度のメシより好きだった釣りに行くより、集会に来る方が楽しくなっていた。そういうことなのです。

この土の器が、弱められ、砕かれるとき、すべてを主にゆだねるとき、聖霊の力が、主ご自身が、働いてくださる。土の器がいつまでも頑固であったら、主は、聖霊は、働くことができません。私たちが“砕かれる”ことがどうしても必要なのは、このためです。

昨年の暮れから私のまわりの親しい親族、親しい集会の友人の上に、大変な試練が立て続けに訪れました。自分のことしか考えなかったこのわがままで勝手な私が、気がついてみると、その人たちのために必死で祈っていました。そんなことができるわけがない。自分の努力では決してできるわけがないことを、気がついてみるとやっている。“この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです。”というのは、こういうことなのでしょうね。そんなとき、そうか、神様が、こんな私のようなものの「土の器の中にも、宝を入れて」くださり、主が働いてくださっているから、こんなことができるんだな、そう実感します。感謝ですね。

試練による救いと鍛錬

神様の訓練の、第2の方法は、試練によって私たちを作り変えてくださる、という方法です。ダビデは、人は、試練なしで救われるようになるといいんだけど、と言っています。しかし、人間はなかなかそういかないんですね。

わたしは、あなたがたに悟りを与え、行くべき道を教えよう。わたしはあなたがたに目を留めて、助言を与えよう。あなたがたは、悟りのない馬や騾馬のようであってはならない。それらは、くつわや手綱の馬具で押えなければ、あなたに近づかない。(詩篇　32･8,9)

人間も、馬やロバのように、くつわで押さえつけられ、手綱でぐいぐい引っ張っていかれ

ないと、なかなか神様の方へ行かない。行けない。そういうものなのですね。多くの人は試練によって、艱難によって、神様の方を向かされ、神様とめぐり合っています。私なども、これでもかこれでもかと連続で試練をいただいて、やっと神様の方を向き、救われました。でもそういう人が実は多いんです。私たちの集会でもほとんどの人は試練によって神様の方を向かされ、神様とめぐり合い、救われています。試練も何もなく、スーっと神様にめぐり合ったという人は、実は数えるほどしかいないのではないでしょうか。

使徒ペテロはイエス様が捕らえられる夜、“鶏の鳴くまでにあなたは三度わたしを知らないと言います”とイエス様に言われました。ペテロは、そんなことは決してありませんとタンカを切ったのですが、情けなや、その通りにイエス様を裏切ってしまいました。イエス様が捕らえられ裁きを受けている中庭へそっと潜入したのですが、そこであなたはあのナザレ人の仲間だろうと言われ、3度、それを否定したのです。ペテロはそのときイエス様のことばを思い出し、自分が最愛の師を裏切ったことに気づき、外へ出て号泣しました。

この絶望のどん底にいたペテロに、復活のイエス様は現われます。そして、あなたはわたしを愛しますかと、3度お尋ねになります。

イエスは三度ペテロに言われた。「ヨハネの子シモン。あなたはわたしを愛しますか。」ペテロは、イエスが三度「あなたは私を愛しますか。」と言われたので、心を痛めてイエスに言った。「主よ。あなたはいっさいのことをご存じです。あなたは、私があなたを愛することを知っておいでになります。」イエスは彼に言われた。「わたしの羊を飼いなさい。」（ヨハネ　21･17）

最愛の師を裏切ったペテロを、イエス様は赦してくださったのです。そして残されたクリスチャンの群れを導くリーダーとして、全てをペテロに託されたのです。こうしてペテロは生まれ変わりました。いままでのお人よしのペテロは、本当に心砕かれた使徒ペテロに、生まれ変わりました。そしてその後の全生涯を、イエス様のために捧げました。

私たちも、さまざまな試練に遭って、神様にめぐり合い、救われました。試練こそが、私たちを救うための愛のご計画であったことを、いま私たちは知ることができます。大変な試練に遭わなければ、決して神様の方を向かないような、そんな私たちをも、神様は見捨てることなく、こよなく愛してくださり、次から次へとありとあらゆる試練をくださってまで、私たちを砕いてくださり、救ってくださった、ということが、いま分かります。

試練は私たちを救うためだけではなく、一度救われた者をさらに鍛えたもうためにも、用いられます。私たちが救われたのは、私たちが天国へ行くための終点ではありません。一人でも多くの人に福音を伝えるため、神様のために働くために、主に用いられるために、救われたのです。終点ではなく、出発点です。

だから神様に用いていただくためには、私たちは神の子にふさわしい者となる必要があります。神の子として用いていただけるような人間にならなければならないのです。神様のためによりしっかり働くために、神様は私たちを日夜、鍛えてくださっているのです。使徒パウロですら試練を与えられています。

また、その啓示があまりにもすばらしいからです。そのために私は、高ぶることのないようにと、肉体に一つのとげを与えられました。それは私が高ぶることのないように、私を打つための、サタンの使いです。このことについては、これを私から去らせてくださるようにと、三度も主に願いました。しかし、主は、「わたしの恵みは、あなたに十分である。というのは、わたしの力は、弱さのうちに完全に現われるからである。」と言われたのです。ですから、私は、キリストの力が私をおおうために、むしろ大いに喜んで私の弱さを誇りましょう。
（2コリント　12･7～9）

パウロの肉体の「とげ」とは、重い眼病であったと考えられています。そんな眼病を治すくらいのことは神様にとって簡単でした。しかし主はそれを癒されませんでした。それは、試練がいつもパウロに備えられていることが必要だと、主がお考えだったからです。いつも試練の中にいて、とことん砕かれた使徒パウロは、もうどんな試練も恐れることなく、主の器として用いられ、主のために働くことができたのです。

クリスチャンと試練

こうしてクリスチャンたちが受けてきた試練には、いくつかの特徴があります。まず第1に、試練は私たちを苦しめ、懲らしめるために与えられるのではなく、私たちを鍛え、もっと大きな恵みを、希望を、与えるための愛の特訓である、ということです。

わたしはあなたがたのために立てている計画をよく知っているからだ。――主の御告げ。――それはわざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのものだ。（エレミヤ　29･11）

したがって、第2に、主は、耐えられないような試練は与えられないこと、試練と同時に脱出の道まで備えて下さる、ということです。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。
（1コリント　10･13）

サタンの攻撃に立ち向かいましょう

ここでいちばんこわいのは、試練に打ちのめされ、つまずいてしまうことです。そんなとき、サタンは猛攻撃を仕掛けてきます。それ見ろ。神様なんかいるものか。神様がいたらどうしてこんなに試練ばかり来るのか。どうして神様はお前のことを助けてくれないのか？神様なんかいないんだ。神様はもしいたとしても、忙しくて、お前のことまで手が回らない！サタンはこう言って、実に巧妙に攻撃してきます。私たちが神様から離れるように仕掛けてきます。これには本当に参ります。

しかしとんでもない。神様は私たちのことを忘れたりされることはありません。すべてをご存知であり、私たちの不安、苦しみ、絶望をすべてご存知の上で、今の試練がどうしても必要だと、お考えだから、いま、試練を与えてくださっているのです。

悪魔がほえたける獅子のように獲物を求めて歩き回り、私たちのすきをうかがっています。悪魔の攻撃にへこたれないで、試練に立ち向かい、試練を乗り切りましょう。

身を慎み、目をさましていなさい。あなたがたの敵である悪魔が、ほえたけるししのように、食い尽くすべきものを捜し求めながら、歩き回っています。堅く信仰に立って、この悪魔に立ち向かいなさい。ご承知のように、世にあるあなたがの兄弟である人々は同じ苦しみを通って来たのです。あらゆる恵みに満ちた神、すなわち、あなたがたをキリストにあってその永遠の栄光の中に招き入れてくださった神ご自身が、あなたがたをしばらくの苦しみのあとで完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださいます。（1ペテロ　5･8～10）

いまの苦難は、決していままでになかったようなものではなく、私たちの先輩キリスト者たちが、すでにみな経験したものばかりです。そして先輩たちも皆その試練に耐え、くぐり抜けてきた者ばかりです。私たちにも耐えられないはずはありません。私たちを救ってくださった愛の神、イエス様が、しばらくのこの試練のあとで、私たちを“完全にし、堅く立たせ、強くし、不動の者としてくださる”ために、しばらくの試練を、いま与えてくださっているのです。悪魔に降参しないで、しっかりと立ち向かいましょう。

キリストの満ち満ちた身たけに

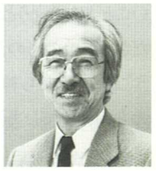
こうして、キリストご自身が、ある人を使徒、ある人を預言者、ある人を伝道者、ある人を牧師また教師として、お立てになったのです。それは、聖徒たちを整えて奉仕の働きをさせ、キリストのからだを建て上げるためであり、ついに、私たちがみな、信仰の一致と神の御子に関する知識の一致とに達し、完全におとなになって、キリストの満ち満ちた身たけにまで達するためです。（エペソ　4･11～13）

私たちは、主を信じ、主につながってさえいれば、主に従ってさえいれば、主は「宝を土の器の中に入れて」くださっており、試練をもって鍛えてくださり、そしてついには、私たち一人一人を、その人を通してイエス様が透けて見えるような、そんな新しい人に、作り変えてくださる、ということでしょう。これがイエス様のお約束です。これほどすばらしい約束はありません。

イエス様はきょうも夜昼、休むことなく、私たちを作り変えてくださっています。トンテンカン、トンテンカン、槌の音が聞こえるようです。もちろん生身の体を作り変えて行かれるのですからたいへんです。飽食で出っ張った腹を削り取り、かたくななコワイうなじを柔らかくし、傲慢な高い鼻を削ぎ落とし、きょうもトンテンカン、トンテンカンと、私たちを神のみ姿に似た者とするために、作り変えてくださっているのです。生身の人間を、そのまま作り変えてくださるのです。時には痛みも伴います。ときには激痛を伴います。もうダメかと思うこともあります。

しかし、主の与えたもう試練は、決して耐えられないようなものはなく、またその目的が“わざわいではなくて、平安を与える計画であり、あなたがたに将来と希望を与えるためのもの”であること、主の愛のご計画であることが確信できるとき、私たちはどんな試練の中にあっても、主に感謝し、平安でいられることは、私たちが体験してきたことです。

神様の、そしてイエス様の願いは、一人でも多くの人間が神様にめぐり合い、救われて、天のみ国で主と共に過ごすことなのです。「聖書」を通して、このような主の愛を知り、イエス様のくださる限りない平安を、皆さんと共に味わっていただきたいものです。



飽戸　弘（あくと・ひろし）
略歴／東洋英和女学院大学教授、東京大学名誉教授、姫路中、県立東濃高、東京大学文学部卒、埼玉大学助教授、東京大学助教授、同教授を歴任。放送と人権等権利に関する委員会など各種委員会の委員を兼任。

いのちの息

白石光一

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。（創世記　2・7）

人は、生命維持のために呼吸（息）で酸素を取り入れ、二酸化炭素を排出しています。からだにおける息はいのちを表しています。急に息ができなくなると、生命の危機を感じとても苦しくなります。私は以前、手術を受けたとき、腰椎麻酔が効きすぎて呼吸筋が麻痺し、苦しい思いをしたことがあります。私たちには、肉体が感じる以上の、苦しく恐ろしいことが起きようとしています。神が与えてくださったいのちの息が薄まって窒息してしまうこと、すなわち神からいただいた本当のいのちが消えてしまうことです。

神である主は、土地のちりで人を形造り、その鼻にいのちの息を吹き込まれた。そこで、人は、生きものとなった。（創世記　2・7）

神から息をいただいた生命体は、人間だけです。からだの生命を支える呼吸は、いつか消えていきます。しかし、神の息は永遠です。この息はすべての人の中に息づいています。ご自分のいのちをかけて救いの道を開いてくださった神の御子イエス・キリストの息が、私たちに与えられました。私たちはイエス・キリストによって瀕死の状態から蘇生されました。このいのちの息を吹き込まれ、今も神の呼吸管理の下にある人とは、神から見てどういう存在なのでしょうか。

主に愛され祝福されている存在

神は彼らに仰せられた。「生めよ。ふえよ。地を満たせ。地を従えよ。海の魚、空の鳥、地をはうすべての生き物を支配せよ。」（創世記　1・28）

例えば石油や石炭などの化石燃料も動植物からできたもので、すべて、人のために神が計画してくださった贈り物です。自然の偶然の産物と考えるよりも、神の意志がそこに存在する、と確信すべきです。これらの恵みは、主が私たち一人ひとりを愛してくださっているサインであるのに、それとは気付かず、この世の当然のことと思っているのです。今、無意識に息をしていることでさえ、神の愛なのです。見える、聞こえる、食べる、飲む、排尿・排便ができる、話しができる、歩ける、書ける、家族がいる、家がある、仕事がある、友人がいる、お金があるなど、すべて当然と思っていることは、この世の中でやがて無くなってしまうものです。入院した患者さんから聞くのは、自分のこれまでの人生で費やしてきたことのむなしさ、家族への愛が足りなかったことの無念などです。健康を失ってはじめて感じることができるのです。辛くさびしく貧しく生きなければならないときは、主に愛され祝福されている存在であることを知るための、大切なときなのです。

子ども、小さなもの、弱いもの、貧しいものである存在

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。（マタイ　18・3、4）

私たちが肩に力をいれて歯を食いしばって我を通しているときは、神を無視して主の愛のサインに目もくれません。神は高ぶった者をも愛するために、自分だけでなく、家族、友人などすべてを用いて、主に愛されていることを知らせてくださるのです。それは、大切なものを取り去られること、何もできない自分を思い知らされることで、辛く悲しいことです。こんなときにとりなしてくださる方、イエス・キリストが居られ、私たちがすべてを神にゆだね、素直に感謝できると、魂に新鮮で力のある息がよみがえって来ます。それが、神のいのちの息なのです。悲しんでいても、弱っていても、苦しんでいても、その息によって慰められ、喜びが湧いてきます。神は私たちに永遠のいのちを約束されているからです。

あなたを形造った方、主はこう仰せられる。「恐れるな。わたしがあなたを贖ったのだ。わたしはあなたの名を呼んだ。あなたはわたしのもの。」（イザヤ　43・1）

死ぬといけない存在

この小さい者たちのひとりが滅びることは、天にいますあなたがたの父のみこころではありません。（マタイ　18・14）

神は小さな存在を愛されます。神のみこころは、ご自身で造られ、いのちの息を吹き込まれた人が、一人として滅びないようにすることです。この神のご意志は、天と地を創られたはじめから貫かれています。

園の中央にある木の実について、神は、『あなたがたは、それを食べてはならない。それに触れてもいけない。あなたがたが死ぬといけないからだ。』と仰せになりました。（創世記　3・3）

神は、私たちが死ぬといけない、と言ってくださいました。それに反して、人間は死への道を歩むことになってしまいました。死とは、肉体の終わりに神とともに永遠に生きることのできない、絶望の世界です。アダムとエバは神のみこころを知っていながら、それに反する行ないをして、死ぬ存在となりました。人は罪ある存在となったのです。神の愛を無視している限り救されません。肉体の死は息を引き取るといいますが、神の吹き込まれたいのちの息の停止は、肉体の死以上に恐ろしいことです。私たちの想像をはるかに超えた状況でしょう。

罪人としての存在

善悪の知識の木を食べた人は、神に従わない存在となり、主がとても悲しむ状況となりました。それは、自分の意思、考え、行いを中心にして生きていることです。そこには神が手を伸べたくてもできない状況があります。この一見自由に見えることが、実は自分は無力であり、むなしいものを追い求め、いのちと反対の方向に向かってさまよい歩いて死に至る、もっとも危険な神に対する罪の状況なのです。そして、そのことに私たちが気付くのを、神は待っておられます。神は、どんなことをしても私たちを罪による死から救おうとされます。自分の思い通りにならないとき、何もできないとき、主に向かって助けを求めれば、哀れみの神は決して無視することはありません。

主はいつくしみ深い。主を待ち望む者、主を求めるたましいに。わざわいも幸いも、いと高き方の御口から出るのではないか。（哀歌　3・25、38）

すい臓癌で亡くなられた50歳台の女性の方を思い出します。受診されたとき、癌はもう腹膜に転移していて、腹水のため腹部は張っていました。ご主人と相談し、性格が神経質で落ち込みやすいことや、家族の希望もあって、告知をせずに膵炎の診断で治療を開始しました。入院、外来での抗がん剤治療を続けていましたが、効果は不十分で、週1回の腹水穿刺によって症状の軽減をはかるのみでした。ご主人から、インターネットで知った新薬の使用依頼やがんセンターでの受診希望などがあり、告知せずにこれ以上のことはできないこと、病状が悪化したとき、本人が真実を知らずにいると病気と死に対して耐えられない苦しみが増すのみであることを説明し、告知することになりました。12月25日クリスマスの日、いつものように外来処置室で腹水を抜き抗がん剤の点滴を行いました。クリスマスプレゼントに重田定義さん（東海大学名誉教授）の福音メッセージ集「何を求めて生きるか」と、次の聖書のみことばを贈りました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。（1コリント　10・13）

そのときの会話で、恵泉女学園の出身で聖書を読んでいたことを知りました。この学園は信仰的な教育方針を持った数少ない学校です。この日のことは、以前から神が備えてくださったのだと、あらためて確信でき感謝しました。

すべての処置が終わったとき、ご主人とお嬢さんに同席していただき、手術不能のすい臓癌であることを告げました。私の手を握り「死にたくない」と何度も繰り返し泣いていました。先ほどの聖書のみことばをもう一度伝えました。12月29日、胆管の閉塞による黄疸の悪化で緊急入院し、胆汁排液チューブを挿入しましたが、病態は良くならず、病床で本を読む力もなくなりました。「何を求めて生きるか」を読み、神への感謝を祈り、最後に一緒にアーメンと言えました。

翌年1月中ごろ、イエス様の十字架の死と復活についてお話しました。「肉体は死んでも、必ず永遠に生きる。決して死にません」。このことばで、死を直前にした人とは思えないほど目は輝き、平安な表情をされました。私は、神のいのちの息により魂が躍動したのを感じ、祈りの後、病室を出ました。その後意識はなくなり、1月22日天国の神のみもとに帰られました。

このことは、決して私がしたことではなく、すべて神がなされたことです。神によってイエス・キリストのいのちの息が強められ、永遠のいのちが与えられたのです。死を目の前にした方々に「あなたは永遠に生きます。決して死にません」と自分の気持ちだけから言える勇気はありません。

わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。（ヨハネ　10・28）

私たちの内にイエス様のいのちの息がある限り、勇気をもって言えるでしょう。

「私たちは永遠に生きる。神様と一緒に生きる」と。

白石光一
略歴／東海大学八王子病院　消化器内科医長
北海道出身
教育大学付属釧路中学校、釧路湖陵高校、東海大学医学部卒



お父さんお母さんにしたがいましょう

皆さんはお父さんお母さんが大好きですか。私は電車の中や通りがかりに親子連れの人に出会ったりすると、とても心が暖かくなります。お母さんたちはいつも自分のお腹からみなさんが生まれてきたときのことを覚えています。産むまでは苦しかったけれど、皆さんが生まれ出たときは喜びで満たされた、と。

ところが、聖書には生まれたときにすぐに殺される運命にあった人の話が出てきます。ナイル川という世界でもっとも長い川に、生まれてすぐにすてられなければならなかった赤ちゃんです。王様がそのような命令を出したからです。けれどもお父さんお母さんはその命令にしたがわず3ヶ月隠しておいて、それから捨てたのです。神様はそんなお父さんお母さんのきもちをよく知っておられたのでしょう。王女様にひろわれ、お母さんは乳母としてやとわれたのです。

この赤ちゃんがモーセです。モーセさんはエジプト王室の一人として育ち、何不自由のない生活をしたのですが、後に神様のお役に立ちたいと考えて、王室をすてました。

聖書の最初のことばは、次のように書かれています

初めに、神が天と地を創造した。神はこのように、人をご自身のかたちに創造された。神のかたちに彼を創造し、男と女とに彼らを創造された。（創世記　1･1,27）

モーセさんは神様から直接、10のいましめをいただきましたが、その中の一つに次のことばがあります。

あなたの父と母を敬え。（出エジプト　20･12）

モーセさんはエジプト王室で育ち、最高の学問を身につけたのですが、お父さんお母さんを尊敬し、神様にしたがう気持ちを、とても大切にしたのです。

私は小学生のときテストで悪い点数を取りました。家に帰って見せるとしかられるので教室の机の中にそっと隠しておきました。けれども、皆と一緒に楽しくしていたお祭りの日に、父がすごい剣幕で私のところにやってきました。私はそれが何なのかすぐにわかりました。私は、悪いことをしているという気持ちがあって、いつもびくびくしていたからです。でも、しかられたそのときはいやでしたが、そのあとは何の隠し事もしなくてすむので、安心して生活したのを思い出します。お父さんお母さんは私たち一人一人の心や体を、いつも神様のように愛して見守ってくださるのですね。

もし、私たちが自分の罪を言い表すなら、神は真実で正しい方ですから、その罪を赦し、すべての悪から私たちをきよめてくださいます。（1ヨハネ　1･9）

けれども、小学校の高学年になるころから自分の中のどうしようもない悪い心、人に良く思われたいという心（虚栄心といいます）で悩むようになりました。それとともに尊敬していた両親に口答えするようになりました。特にお父さんのすることが一々気になり始め、批判するようになりました。

これは聖書のことばによると、全部罪からくることなのです。聖書はそのような罪からの救い主として、イエス様を私たちに紹介しています。そのイエス様も、モーセさんと同じように生まれてすぐ殺される恐れがあったことを、知っていますか。イエス様は神の子でありながら、汚い汚い家畜小屋でお生まれになり、飼葉おけに寝かされたのです。

ところが、彼らがそこにいる間に、マリヤは月が満ちて、男子の初子を産んだ。それで、布にくるんで、飼葉おけに寝かせた。宿屋には彼らのいる場所がなかったからである。（ルカ　2･6,7）

このイエス様は、いつも天の父である神様にしたがっておられましたが、地上のお父さんお母さんにもつかえ、まわりのどんな人も愛されました。だから神と人とに愛されたお方です。

このイエス様が私たちの罪の身代わりに十字架におかかりになり死なれたのです。

人がその友のためにいのちを捨てるという、これよりも大きな愛はだれも持っていません。（ヨハネ　15･13）

どんな人も自分のいのちを大切にします。お父さんお母さんからいただいた大切ないのちですものね。その尊いいのちを、私たちのために投げ出して下さったのがイエス様です。イエス様は私たち一人一人を友と言ってくださっています。

ダイスキ？

イエス様は生まれるとき、こんな家に生まれたくない、と思うこともできたでしょう。だってイエス様は神様ですし、自分のことばかり考えるわがままな人間といっしょに暮らす必要もなかったからです。でも、イエス様はそうは思われませんでした。父である神様の心にしたがいたい、と思われたのです。十字架におかかりになる前のことは、聖書に次のように書かれています。

そして彼らに言われた。「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここを離れないで、目をさましていなさい。」それから、イエスは少し進んで行って、地面にひれ伏し、もしできることなら、この時が自分から過ぎ去るようにと祈り、またこう言われた。「アバ、父よ。あなたにおできにならないことはありません。どうぞ、この杯をわたしから取りのけてください。しかし、わたしの願うことではなく、あなたのみこころのままを、なさってください。」（マルコ　14･34～36）

イエス様は、父である神様から完全に離れることがとても悲しかったのです。でも、わたくしたちがわがままで、罪に負けている姿をかわいそうに思い、十字架刑という罰を私たちのかわりに受けてくださったのです。それが神様のご命令だったのです。

皆さんはお父さんお母さんが大好きでしょう。でもひょっとしたら、これから体が大きくなってゆくにつれ、お父さんお母さんの言うことが、煙ったくなるようなときが来るかもしれません。でも、そういうときにモーセさんやイエス様のことを思い出してください。お父さんお母さんにしたがうことを通して、必ず神様は祝福してくださるからです。

訓練と思って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生児であって、ほんとうの子ではないのです。（ヘブル　12･7,8）

もっと小さいときは気にならなかったのに、このごろお父さんやお母さんは自分のすることに一々口を出して注意する。だから、こんなお父さんお母さんならいないほうが良いと思い、「自分はこの家の子じゃない、どっかからひろってきたんだ。」と言ってしまうことがありませんか。もし自分の子どもからそんなことを言われたら、お父さんお母さんはどんなに悲しまれることでしょう。

実は同じことを、私たちひとりひとりも神様に向かって言っている、と聖書は語っています。神様は私たちに、大切なお父さんやお母さん、友だち、山や川、きれいな花、鳥などを与え、育んでくださっているのに、そんな神様なんか知らない、と言っていますし、そのように行動しているのです。

たとえば、いまの時代は科学技術がますます進み、自然を改造したり、ひとのいのちさえ造れるとうぬぼれて、いつのまにか神様を否定しています。いまの世の混乱は、そのことと無関係ではないでしょう。

どうしてなのでしょう。ひとりひとりが素直になってイエス様にたよらないからです。多くの人は心のそこでは神様の存在を否定していません。

大切なのは、私たちの心が自分のわがままをみとめて「ごめんなさい。私は神様がおられるのに無視してきました。これからはあなた様にしたがいます。」と悔い改めることです。その心があるかないか、が問題です。神様の存在を認めても、たよらなければ本当の自由はないのです。

皆さんは、いじめの問題や塾の勉強のこと、あるいはお父さんお母さんのことなどで、悩んでいませんか。イエス様はそれらのことを全部知っておられます。だから、そのままの心でイエス様にたよってみてください。それをじゃまする心の働きがあるとすれば、それは子どもの心をすてて早くおとなになろうとする心です。イエス様は次のように語ってくださっています。

まことに、あなたがたに告げます。あなたがたも悔い改めて子どもたちのようにならない限り、決して天の御国には、はいれません。だから、この子どものように、自分を低くする者が、天の御国で一番偉い人です。（マタイ　18･3,4）

吉田　浩
略歴／越谷西高校教諭（地理、倫理、政経担当）。高宮中、島根東高、滋賀大学経済学部卒。





**人がその友のために
いのちを捨てるという、
これよりも大きな愛は
だれも持っていません。
（ヨハネ　15･13）**

メッセージ当番表（1月— 3月）

「あなたの神、主は、あなたのただ中におられる。救いの勇士だ。
主は喜びをもってあなたのことを楽しみ、その愛によって安らぎをあたえる。
主は高らかに歌ってあなたのことを喜ばれる。」（ゼパニヤ3:17）

	1月				2月			
	5日	12日	19日	26日	2日	9日	16日	23日
北海道	中山Y	川股	野口T	杉本	芳竹	加藤S	重田H	武井
青森		奥		笠井		藤田		福島
仙台／盛岡	深沢	松田	片桐	北原	奥	田中J	高田	松見
新潟		山下		江藤		富田		棚村
宇都宮	金井	谷口	御任	羽石	川股	藤井	見目	谷口
日立／土浦／大洗	南村	羽石	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	藤田
川越	代田	江田	川股	古田K	野口T	白石Y	御任	重田S
春日部	川股	藤井	小々馬	鈴木H	西村	御任	大庭	滝
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾	伊牟田	大野	染野	槙野
市川	大場	重田S	滝	黒沢	小西	小川	岩崎	会沢
東京 10:30	ベック	平山	野田	飽戸	白石K	重田S	辻田H	菊池
東京 14:00	小島	近森	藤田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田稔
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	久田	古屋	中山Ch	中村K	野口H
横浜	田中J	北原	酒井M	小川	兵藤	立之	松田	山田K
相模原	江藤	神沢	石井A	重田S	飽戸	代田	菊池	旭
御代田	若山	末永	江藤	片桐	野口O	長岡	織田	小島
伊那	山田M	片桐	若山	田中J	羽石	片桐	長岡	織田
富山	大下	吉田	柿沼Y	青柳	片桐	仲井間	羽石	長岡
藤枝	今川	内藤	金子	野田	キャンプ	芝田	酒井M	染野
掛川	大塚	酒井M	今川	辻田H	キャンプ	神沢	大塚	青柳
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	キャンプ	三五	河辺	辻田H
名古屋／豊橋	津田	和田Y	今村	山科	キャンプ	那須	会沢	酒井M
石川／福井	伊牟田							槙原
近江八幡		古田K			青柳			
大阪	小久保	植原	岩崎	酒井Ch	内田	森島	池島	渡辺S
芦屋	藤原T	青柳	伊牟田	吉田	滝	瀬島	野口O	新井
西神	渡辺S	飽戸	岡本M	池島	小久保	滝	小川	内田
島根			福代				森田	
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	森島	渡部Y	末永	瀬島	上田
岡山	内田H	広橋	近森	広田	久田	野間	山科	河野
高松／徳島	野間	岩崎	池田D	鈴木T	笠井	高島	後藤	中山K
高知	岡本H	大須賀	飯守	池田D	野間	近森	金子M	伊野
松山／西条	光藤	野間	山本	和田Y	藤原T	江藤	白石K	岡本M
福岡／別府	浅野	岩本	キャンプ	庄野	重枝	山口H	キャンプ	古田K
長崎／佐世保	松井	辻田H	キャンプ	松井	辻田M	別所	キャンプ	松井
宮崎／小林	高橋I	上野	キャンプ	武井	岩本	染野	キャンプ	桜本
鹿児島／熊本	加藤M	江藤	キャンプ	平山	石塚	重枝	キャンプ	平井
沖縄／宮古	鵜飼	河辺	仲井間	崎浜	江藤	松見	平良M	芳竹
石垣		ベック		喜屋武		古田K		
米国／カナダ						キャンプ		
グアム			古田M	キャンプ				古田M
バンコク				石井A	平山			キャンプ
喜びの集い	12/31-1/2		18-19	25-26	1-2	6-10	15-16	22-25
	御代田		熊本	グアム	豊橋	ロサンゼルス	別府	バンコク
祈り会 (7:30PM～)	9	16	23	30	6	13	20	27
	重田S	田中J	清水Y	小島	水渡	杉本	芳竹	和田Y
II ペテロ	1. 1-2	1. 3-9	1. 10-11	1. 12-15	1. 16-21	2. 1-3	2. 4-11	2. 12-16

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。
ニューフェイス：水渡紀久雄（相模原）、高橋　勇（小林）

	3月				
	2日	9日	16日	23日	30日
北海道	藤原N	岩崎	中山Y	岩下	中山Y
青森			キャンプ	中山Ch	
仙台／盛岡	立之	蘇畑	キャンプ	菊池	増森
新潟	野田	笠井		重田H	柿沼M
宇都宮	見目	野田	吉田	御任	鈴木H
日立／土浦／大洗	槙野	キャンプ	上村	石井K	吉田
川越	岩上	飯島H	上野	内藤	大庭
春日部	野口O	重田S	宮田	辻	小西
印旛／鹿島	滝	末村	小西	小川	山口I
市川	田尾	飽戸	鈴木T	小島	大沢
東京 10:30	藤本	酒井Ch	池田D	青柳	古田K
東京 14:00	河辺	岩本	染野	江藤	蘇畑
東京 19:00	柿沼Y	旭	佐山	田中J	小々馬
横浜	柿沼M	菊池	寺田	黒田	中山Ch
相模原	牧野	内藤	山田K	立之	酒井M
御代田	羽石	平井	植原	飽戸	岩崎
伊那	植原	末永	小野沢	平井	清水Y
富山	平	富田	山下	野口O	酒井Ch
藤枝	武井	芝田	白石Y	小林	平山
掛川	飽戸	石塚	岩上	染野	大塚
蒲郡	倉橋	清水N	清水Y	白石Y	大高
名古屋／豊橋	辻田H	田中J	今川	上田	松本S
石川／福井				重田S	
近江八幡		吉田			
大阪	大場	広田	中山K	寺田	山科
芦屋	森島	中山K	池島	羽石	長岡
西神	田中J	久田	森島	渡辺S	小山
島根		瀬島		黒田R	
山口／広島／徳山	芳我	杉本	岡本M	森田	秋本
岡山	キャンプ	岡本M	後藤	福島	キャンプ
高松／徳島	キャンプ	山本	河野	岡本M	キャンプ
高知	キャンプ	青柳	窪内	池田J	キャンプ
松山／西条	キャンプ	森島	内藤	古田K	キャンプ
福岡／別府	小山田	庄野	別所	今村	滝
長崎／佐世保	庄野	別所	加藤M	北原	山口H
宮崎／小林	平山	藤原N	松井	菅原	高橋I
鹿児島／熊本	古田M	和田Y	羽石	松井	青柳
沖縄／宮古	蘇畑	池田D	青柳	代田	喜屋武
石垣	平良M			芳竹	
米国／カナダ			和田Y	キャンプ	古田M
グアム					
バンコク					
喜びの集い	1-2	8-9	15-16	23-28	29-30
	高松	大洗	盛岡	ワシントンD.C.	高知
祈り会 (7:30PM～)	6	13	20	27	
	佐山	山本	大須賀	牧野	
II ペテロ	2. 17-22	3. 1-7	3. 8-9	3. 10-13	

※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。

2003年 よろこびの集い

1 January
- 12月31日－ 2日　御代田（1日:コンサート）
- 18日－19日　熊本
- 25日－26日　グアム

2 February
- 1日－ 2日　豊橋
- 6日－10日　ロサンゼルス
- 15日－16日　別府
- 22日－25日　バンコク

3 March
- 1日－ 2日　高松
- 8日－ 9日　大洗
- 15日－16日　盛岡
- 23日－28日　ワシントンD.C.
- 29日－30日　高知

4 April
- 5日－ 6日　大阪
- 11日－13日　御代田（ドイツの方々参加）
- 19日－20日　沖縄（ドイツの方々参加）
- 26日－30日　バンクーバー

5 May
- 3日－ 5日　御代田(5日:コンサート)
- 10日－11日　広島
- 17日－18日　札幌
- 24日－25日　松山

6 June
- 5月30日－ 2日　上海
- 7日－ 8日　富山
- 18日－25日　ドイツ（ミヘルスベルグ）
- 26日－7月6日　ドイツ（ミヘルスベルグ）

7 July
- 18日－20日　御代田
- 25日－27日　御代田

8 August
- 1日－ 3日　御代田
- 8日－10日　御代田
- 15日－17日　御代田
- 22日－24日　御代田
- 29日－9月1日　上海

9 September
- 6日－ 7日　石川／福井
- 13日－14日　神戸
- 19日－21日　御代田
- 27日－28日　宮崎

10 October
- 4日－ 5日　未定
- 11日－12日　未定
- 18日－27日　ドイツ（フィリンゲン）

11 November
- 3日　メサイアコンサート（東京）
- 8日－ 9日　仙台
- 15日－16日　島根
- 22日－23日　八戸
- 29日－30日　新潟

12 December
- 4日－ 7日　上海
- 13日－14日　徳島
- 20日－21日　福岡
- 31日－1月2日　御代田(1日:コンサート)

メッセージ当番表（4月— 6月）

「しかし、もし神が光の中におられるように、私たちも光の中を歩んでいるなら、御子イエスの血はすべての罪から私たちをきよめます。」（Ⅰヨハネ1:7）

私たちは互いに交わりを保ち、

	4月				5月			
	6日	13日	20日	27日	4日	11日	18日	25日
北海道	重田H	川股	中山Y	杉本		加藤S	キャンプ	武井
青森	キャンプ	奥		笠井		藤田		福島
仙台／盛岡	キャンプ	松田	松見	深沢	奥	高田	片桐	北原
新潟		山下		江藤		富田	棚村	
宇都宮	藤井	谷口	御任	羽石		金井	見目	谷口
日立／土浦／大洗	羽石	南村	平山	和田S	松田	柿沼Y	松見	藤田
川越	代田	小野沢	川股	古田K		白石Y	御任	江田
春日部	川股	藤井	小々馬	鈴木H	西村	御任	滝	大庭
印旛／鹿島	岩崎	会沢	笠井	松尾		槙野	染野	伊牟田
市川	大場	田中J	滝	黒沢	小西	小川	岩崎	会沢
東京 10:30	野口O	平山	野田	飽戸	白石K	池田D	辻田H	菊池
東京 14:00	小島	近森	藤田	松見	富岡	岡本M	石塚	古田稔
東京 19:00	黒沢	辻	大須賀	古屋	久田	中山Ch	中村K	野口H
横浜	田中J	北原	酒井M	小川	兵藤	立之	松田	山田K
相模原	江藤	神沢	石井A	加藤S	飽戸	代田	菊池	旭
御代田	若山	キャンプ	末永	片桐	キャンプ	長岡	織田	小島
伊那	末永	キャンプ	若山	田中J	キャンプ	片桐	長岡	織田
富山	吉田	大下	柿沼Y	青柳		仲井間	富田	長岡
藤枝	今川	内藤	金子	野田		芝田	酒井M	染野
掛川	辻田H	酒井M	今川	秋本		神沢	大塚	青柳
蒲郡	野田	小西	岩本	新井	三五	会沢	河辺	辻田H
名古屋／豊橋	酒井M	那須	今村	山科	新井	和田Y	会沢	津田
石川／福井	槙原	和田Y		重田S		伊牟田		重田S
近江八幡			古田K				青柳	
大阪	キャンプ	植原	岩崎	酒井Ch	内田	森島	池島	渡辺S
芦屋	キャンプ	青柳	伊牟田	吉田	藤原T	瀬島	野口O	新井
西神	キャンプ	渡辺S	岡本M	池島	小久保	滝	小川	内田
島根			福代			キャンプ	森田	
山口／広島／徳山	山口H	笠井	香川	末永	渡部Y	キャンプ	瀬島	上田
岡山	河野	広橋	近森	久田		野間	渡辺S	キャンプ
高松／徳島	山本	岡本M	鈴木T	青柳		笠井	広橋	キャンプ
高知	岡本H	岩崎	飯守	近森		重田S	池田D	キャンプ
松山／西条	和田Y	野間	山本	光藤		江藤	近森	キャンプ
福岡／別府	浅野	岩本	松井	庄野		山口H	滝	小山田
長崎／佐世保	別所	辻田H	染野	松井		別所	庄野	松井
宮崎／小林	藤原N	上野	河辺	武井		染野	平山	桜本
鹿児島／熊本	庄野	江藤	須藤	平山		重枝	羽石	石塚
沖縄／宮古	重田S	河辺	キャンプ	崎浜		松見	平良M	芳竹
石垣	重田S		キャンプ			喜屋武		古田K
米国／カナダ				キャンプ				和田Y
グアム			古田M			古田M		
バンコク				石井A				平山
中国								
喜びの集い	5-6	11-13	19-20	26-30	3-5	10-11	17-18	24-25
	大阪	御代田	沖縄	バンクーバー	御代田	広島	札幌	松山
祈り会（7:30PM～）	3	10	17	24	1	8	15	22
	野田	重田S	田中J	清水Y	小島	水渡	杉本	芳竹
Ⅱペテロ	3. 14-16	3. 17-18	Ⅰヨハネ1. 1-4	1. 5-10	2. 1-2	2. 3-6	2. 7-11	2. 12-14

◆各集いの準備担当者は、参加者リスト（ローマ字の氏名も）を事前にベックさんへEメールで送ってください。アドレスは、gotthold_beck@hotmail.comです。

	6月				
	1日	8日	15日	22日	29日
北海道	藤原N	岩崎	野口T	岩下	芳竹
青森				中山Ch	
仙台／盛岡	立之	蘇畑	川股	菊池	増森
新潟	野田	笠井		重田H	柿沼M
宇都宮	見目	野田	吉田	御任	鈴木H
日立／土浦／大洗	槙野	後藤	上村	石井K	吉田
川越	野口T	飯島H	上野	内藤	大庭
春日部	宮田	野口O	会沢	辻	小西
印旛／鹿島	滝	末村	小西	小川	山口I
市川	田尾	飽戸	鈴木T	小島	大沢
東京 10:30	酒井Ch	藤本	重田S	青柳	古田K
東京 14:00	河辺	岩本	染野	江藤	蘇畑
東京 19:00	柿沼Y	旭	佐山	田中J	小々馬
横浜	柿沼M	菊池	寺田	黒田	中山Ch
相模原	牧野	内藤	山田K	立之	酒井M
御代田	羽石	平井	植原	飽戸	岩崎
伊那	植原	山田M	小野沢	平井	清水Y
富山	平	キャンプ	山下	野口O	酒井Ch
藤枝	菊池	武井	白石Y	小林	平山
掛川	飽戸	石塚	岩上	染野	大塚
蒲郡	倉橋	清水N	清水Y	白石Y	大高
名古屋／豊橋	辻田H	田中J	今川	上田	松本S
石川／福井		キャンプ			重田S
近江八幡		吉田			
大阪	大場	広田	中山K	寺田	山科
芦屋	森島	小久保	池島	中山K	長岡
西神	田中J	久田	森島	渡辺S	小山
島根		瀬島		黒田R	
山口／広島／徳山	芳我	杉本	岡本M	森田	秋本
岡山	藤原T	岡本M	後藤	福島	内田H
高松／徳島	中山K	野間	大須賀	河野	高島
高知	金子M	青柳	伊野	池田J	窪内
松山／西条	白石K	森島	内藤	古田K	広田
福岡／別府	中野	古田K	別所	今村	重枝
長崎／佐世保	浅野	辻田M	加藤M	北原	山口H
宮崎／小林	古田K	岩本	松井	菅原	高橋I
鹿児島／熊本	上野	加藤M	古田M	松井	青柳
沖縄／宮古	蘇畑	池田D	仲井間	代田	喜屋武
石垣		平良M		芳竹	
米国／カナダ				古田M	
グアム					
バンコク					
中国	キャンプ				
喜びの集い	5/30-2	7-8	18-25		26-7/6
	上海	富山	ミヘルスベルク		ミヘルスベルク
祈り会（7:30PM～）	29	5	12	19	26
	牧野	佐山	山本	大須賀	和田Y
Ⅱペテロ	2. 15-17	2. 18-19	2. 20-24	2. 25-29	3. 1-3

※Eメールを使えない場合は速達で郵送してください。



みことばと芸術作品が並んだ「羊飼い展」

絵画や写真を通して、私たちの羊飼いであられる主イエス様に感謝と賛美を捧げ、福音を伝えたい——。こんな願いを込めた第3回「羊飼い展」が平成14年11月20日から5日間、東京・三鷹市芸術文化センターで開かれました。展示されたのはキリスト集会に集う21人の方々の作品50点。自然や花を描いたものが多かったのは、造物主の御業のすばらしさを表現したい、という気持ちの表れと思えます。作品と並べて、各出品者が選んだ21の聖句を掲示したことも「羊飼い展」ならではの特徴で、芸術作品とみことばの組合わせは不思議なハーモニーを生み出していました。



バッハを介してメール伝道

キリスト集会の合唱団で、男声（バス）のパートリーダーを務める須藤辰郎さんは、元プロのフルート奏者。バッハ作品のCDをカンタータだけでも二百数十枚集めた、というバッハ愛好家です。

その須藤さん、出身地の熊本へ出向いて、聖書のみことばをとりつぐ奉仕をしていますが、このほど熊本キリスト集会で同じバッハ愛好家、Aさんとの奇しい出会いを持つことができました。

須藤さんはパソコン通信で、「ヤフー掲示板」の「バッハについて語りましょう」という欄に信仰的なことを書き込んでいるうちに、Aさんと"メールの友"になったのです。そして、須藤さんが熊本へ行く10月に、Aさんが大阪から熊本へ転勤し、住まいも集会の持たれる水前寺公園でした。主の導きを強く感じた須藤さんは、ためらわずにAさんをお誘いして、出会いが実現したのです。

「バッハの音楽を聴けば聴くほど、信仰との結びつきを強く感じる」というAさんは、集会の人たちともなごやかに語り合い、須藤さんから贈られた聖書や集会の出版物を手に「また来ます」と言って帰っていかれたそうです。

「バッハについて語りましょう」への参加者では、Aさんのほか数人の方が信仰に興味を示しているそうです。



ドイツから来られた主にある姉妹の証し

今年5月、ドイツから
13人のシュベスター（主にある姉妹）が来日して、
キリスト集会の各地の集いに参加しました。

ケルンに近いブッペンタールを拠点に奉仕活動をしている
「ベテスダ姉妹会」の方々で、集いでは、イエス様の恵みや信仰生活の
体験などについて、たくさんのお話をしてくださいました。

以下、その一部を紹介しましょう。



救いとは恵みそのものです。

Schwester Ursula Hoffmeister　シュベスター・ウルスラ　（5月19日　西軽井沢国際福音センターで）

キリスト集会の皆さんが、私達のような者を喜んで受け入れてくださったことを、心から感謝します。私は自分の体験を通して、罪を犯しても解放される可能性がある、ということをお話したいと思います。

私は小さいときから、嘘をついたり、盗んだり、悪口を言ったり、まったく自分のことしか考えられない者でした。12歳か13歳のとき、ある牧師の家庭で働くようになりました。赤ちゃんの世話をする仕事でした。それまで、あっちこっちと落ち着かない生活を続けていた私でしたが、そのときから、ここがゆっくり勉強できる場所、くつろげる場所となりました。家族の人が皆で祈っている姿を見たり、彼らの会話の内容を聴いたりもしました。共に教会に行きましたし、合唱団にも入りました。こうして表面的には大きく変わりましたが、私そのものはそのままでした。相変わらず、嘘をつき、泥棒もしてしまいました。

あるとき、私はとんでもない事件を起こし、裁判にまでなりました。そして裁判でも、嘘をつき続けました。本当のことを言わず、他人のせいだと言い続けたのです。その頃を振り返って言えることは、その牧師家族が、私のために祈り続けていてくださった、ということです。

おそらく、その祈りの結果だと思います。あるとき私は事実をすべて書こう、という気持ちになったのです。それでも、その事実を口に出して言うことには、強い抵抗がありましたが、いろいろな人に励まされて、最終的に話す決心をしたのです。

私は「裁判官は何と言うだろう。どこの施設に入れられるのか。鑑別所に入ることになるのか」などと思い巡らしました。そして、話し終えて、結論を待っていましたら、奇跡が起きたのです。裁判官は立って「若い少女よ、あなたは真理が何か、もう分かったでしょう。それが分かったなら、家に帰ってよい」と告げられたのです。考えられないことでした。裁判官の話が終わったとき、私は皆の前にひざまずき、祈って「イエス様、ごめんなさい。私を受け入れてください！」と叫んだのです。そのときから、はっきり分かったのです。救いは恵みそのものであると。主は私の支払うべき借金を払ってくださったのです。このことを私は、どこでも、誰にでも話したいのです。救われるとは、恵みそのものである、ということを。

主のみこころだけがなりますように

Schwester Elisabeth Dreckhoff　シュベスター・エリザベート　（5月19日　西軽井沢国際福音センターで）



私は南ドイツのシュトゥットガルトから来たものです。そこの病院に付属する看護婦学校で30年間教えてきました。学校では、医学的なことを教えるだけではなく、イエス様を紹介することにも努めて来ました。学生に強調したのは、どんなときでも一人で頑張らないでイエス様に頼ってほしい、イエス様に頼れば祝福されますよ、ということでした。

過去何年かを振り返って、「一生懸命やったけれども、実になったのでしょうか？」と思うこともあります。しかし、実になったかどうかは、私には分からないけどイエス様は知っておられる、それでよいのではないか、と思っています。大切なのは、どこにいても何をやっても、主のみこころだけがなりますように、と祈り続けることではないでしょうか。いろいろな方々が、いろいろなことをしますが、何をするかが大切ではなく、心から主のためにやること、そうすれば祝福されると確信しています。聞く耳を持つこと、教えて下さいという気持ちを持つこと、そして従うこと、それだけで十分ではないでしょうか。



あなたはイエス様に愛されています

Schwester Annemaria Mauz　シュベスター・アンネマリア　（5月14日　吉祥寺キリスト集会所で）

私は12歳でイエス様を救い主として受け入れ、14歳のときシュベスターとして主にお仕えすることがみこころである、という確信をいただきました。「将来結婚し、子どもも欲しい」という思いもありましたが、主は私に、奉仕の道を歩むよう語り続けられました。17歳で看護婦学校に入り、看護婦として働くだけでは本当の喜びがなかったため、卒業後は施設で老人介護を学ぶようになったのです。

私は働いていた間、ずっと「死んでいく人々のためにもっと時間が欲しい」と思い、祈っていました。定年を迎えたときも「一人ぼっちで死に向かう人のところに行かせてください」と祈りました。後で分かったのですが、そのときホスピスで経験者を一人求めていました。新しいご奉仕の道を主は備えてくださったのです。今もそのご奉仕を続けています。

死を迎えようとしている人のために、まずなすべきことは、イエス様によって愛されていること、心配されている事実、を伝えることではないでしょうか。

2、3ヶ月前、死を目前にした老婦人のところに呼ばれたときのことです。初対面のこの方は、目は開いたまま、口も閉じたままで、何をしていいか分からず、「話しても無駄かもしれない」と間違った考えを抱いてしまいました。しかし、すぐあとで、彼女に触れて「あなたは一人ぼっちではないのよ」と知らせたくなり、聖書を2、3カ所読んで「信仰の歌」54番を歌いました。「神は愛そのもの」という内容の歌です。すると、老婦人は急に「確かに主なる神は愛そのものです。主は私をも愛してます」と言ったのです。その後2～3回、同じ歌を彼女のために歌いました。そして共に祈ることができました。2、3日後に召された彼女が最後に口にした言葉は「私は祝福されている者です」でした。

試練のあるところに、おいしい水はわきます

Schwester Doris Lebczynski　シュベスター・ドリス　（5月21日　吉祥寺キリスト集会所で）



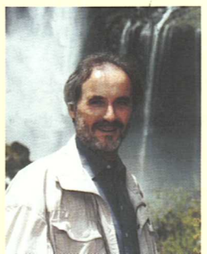
一昨日の西軽井沢国際福音センターでの礼拝、福音集会、コンサートは、私にとって天国のようでした。しかし、天国ではないことは、進行がんの身で「証し」を語られた伊野朱美さんを通して分かりました。伊野さんは「後ろにも引き返せない。前には海があるし、左右を見ても山がある。でも、それと関係なく主は私を広いところに導いてくださった」と話してくださったのです。大切なのは、主は人間一人一人を大切にしてくださるということ、私でさえも愛されているということです。

私も、何度も何度も主は生きておられ、語ってくださることを体験しました。私は生まれつき、苦しみたくない、問題にかかわりたくない、という性質の人間です。看護婦の仕事は、患者さんとの人間関係、同僚との人間関係、あらゆる種類の仕事など、どれも簡単ではなく、特に責任者となると大変です。そんな中、「もうたくさん。多すぎます」と私は叫んでいました。そのとき、一つのみことばを与えられました。**確かに、わたしは荒野に道を、荒地に川を設ける。（イザヤ 43･19）** この約束を体験し自分のものとしたとき、わたしは喜んでこの仕事を続けることができるようになりました。

あるとき、これ以上一緒に働くことはできない、と思える同僚がいました。しかし、「主ご自身が導く。目的をもって導く。主が成し遂げてくださる」と主は語ってくださいました。すると説明できない平安に満たされたばかりではなく、共に働き続けることができるようになったのです。ときに争うこともありますが、主はつねに新しい道を開いてくださいましたし、互いに信頼するようにもなりました。主の導きが分からない場合でも信頼すれば、主が祝福してくださいます。

私は2週間前、ディアコニセ（一生を主に捧げて奉仕する女性）になって40年の記念日を迎えました。それを記念する修養会で、ある男性の信者は「最もおいしい水の湧（わ）く所は、戦いのある所だ」と語りました。結局、さまざまな戦いのあるところで、あるいは耐えられないような状況に置かれたときに、主は助けの御手を差し伸べたい、と望んでおられるのです。あなたがたが日々、新たな主の助けを経験すること、それを主は望んでおられます。

引率のビューリンゲルさん
(Mr. Norbert Boehringer)







よろこびのコンサート（2002年8月10日、西軽井沢国際福音センター）での証しから

肝臓癌を与えられて

飯島　夏樹

1966年東京八王子市に生まれる。八王子東高、琉球大学卒。ウインドサーフィンのプロとして88年から6年間ワールドカップで世界転戦。グアムでマリンスポーツ業を自営。家族は妻寛子さん、長女小夏さん、双子の長男寛さん、次男吾郎さん、三男多蒔さん、母福田名水子さん

グアムから来ました飯島夏樹です。

まず、今回の私の病のことで、全国また海外の方、いろいろな方に祈り助けていただき、ほんとうにありがとうございました。家族一同、心から感謝しています。

大きな手術から1ヶ月半が過ぎまして、体調もずいぶんと回復してきました。5日前に、また新たな腫瘍が見つかりまして、治療のため再入院していましたが、今、主にあって生きる力がわいてきています。試練を共に歩んでいます私の愛する妻も、「この数ヶ月間の日々を思い起こすと、突然私たちに起こされた出来事は最悪で、明日のことも考えられないような状況でしたが、振り返れば、それは輝いた日々でした」と、言っています。

それでは、今回のいろいろなことを通して、イエス様が私にしてくださったことを、証しさせていただきます。私は今、35歳で4人の子どもたちの父親です。4人の子どもたちは、まだ小さく、上は8歳、次に6歳の双子、下は11ヶ月で、やっと伝い歩きを始めたばかりです。私は以前、ウィンドサーフィンというスポーツで、ワールドカップを戦うプロ選手でした。その経験をいかして、現在グアムで、海関係の小さい会社を経営しています。

私は、今から数ヶ月前に父を亡くしました。40日間もの長い期間を、集中治療室で過ごしての死でした。健康を絵に描いたような丈夫な父でしたが、最後の40日間は多臓器不全で、こっちが良くなれば、あっちが悪くなるといった手のつけられない状態で、いろいろなチューブに繋がれて召されていきました。

父は、私たち子どもたちにも、小さい頃から身体を鍛えることの大切さに重きを置いて育ててくれました。「丈夫な肉体があれば、厳しい世の中にも耐えることができる」との信念があったようです。そのおかげで、私も健康にたくましく育ち、身体に自信を持っていました。

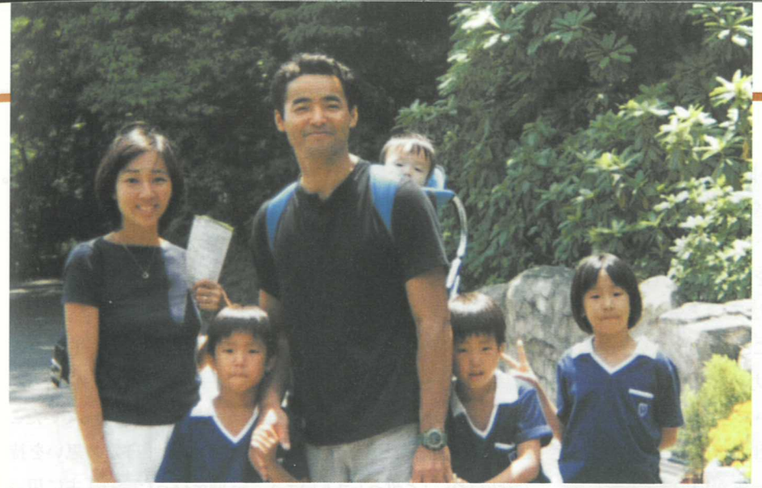
父の闘病中に、突然私にも大きな病を与えられました。それは、「肝臓癌」という思いを超えた病でした。腫瘍はいくつかあって、その一つは、野球のボールよりも大きなものでした。20歳の頃から、レースのため旅の生活が多く、健康診断など一度もしたことがなかったので、入院中の変わり果てた父の姿を見て、「一回くらいは行ってみるか」と、軽い気持ちで人間ドックを訪れたときに、肝臓に腫瘍が見つかったのです。今まで、怪我はたくさんしてきましたが、病気は初めてです。これにより、自信を持っていた健康をまったく突然、取り去られてしまったのです。

この癌という病を与えられたとき、私の心は幸いにも、「ああ、そうですか。イエス様、今度は癌ですか」と素直に受けとめられました。イエス様と私の関係は、それほど悪いものではありませんでした。これは、本当に感謝でした。自分は、本当に恵まれた環境にありまして、「家、仕事、幸せな家庭、健康などを取り去られたときにこそ、自分の信仰が試されるのだろうな」とつねづね思っていました。そうなったとき、果たして私は、「満ち足りている」と心から言えるだろうか。ひそかに楽しみにしてもいたのです。そして、思いもかけず、健康を取り去られることになって、何とか「私には十分です」と素直に言えましたのは、私の力ではなく、癌の病をも上回る、イエス様の恵みのゆえ、と思います。

そう言うと、さらりとしていますが、そのときは、ことの重大さがよく分かっていなかっただけかもしれません。病気というのは、本当にじわじわとやってきます。自分が主に対して、子どものように素直で立派な信仰を持っていたかというと、まったく疑問です。後になって思えば、主に対する信頼の裏には、もう、このしんどい世界から解放され、天国に行ける安堵感と、いろいろなものに捕らわれて生きることに、知らず知らず疲れていたからかもしれません。残される家族のことなど、あまり考えずに自分のことだけ考えていたのです。実際、妻は4人の子どもを残され、未亡人になるかもしれない心配から、「まったく、さっさと行っちゃうなんて、ずるいわね。」と、正直思ったそうです。

もし、私の中に「素直に従う心」が、少しでも養われていたとしたら、自分の信仰というよりも、風と波によって訓練されたからではないかと思います。そして、それも私が救われる以前から、主が働いてくださったことでした。

前にお話ししたように、私はウィンドサーフィンの選手として、ワールドカップを転戦する生活を長らくしてきました。世界中の海を旅して、20代の全エネルギーを、風と波と勝負に費やしてきたのです。勝利と栄誉を求めて、風や波に集中すればするほど、風の前では、「自分は、まったく無力だ」ということを、認めさせられました。やればやるほど、自分のちっぽけさを知りました。ワールドカップ選手といっても、主の造られた自然の前では、つねに脇役で、わがままな思いは、まったく聞き入れられません。ただ風と波に従うしかないのです。寒い日や、あまりに波が大きいときは、正直怖く、めんどうで、乗りたくないのですが、自分の思いを捨てて、そのとき与えられた状況に文句を言わず、ただやるしかないのです。そして大抵は予期せぬ風です。今思うと、そうとう自分勝手な、まったく的外れな努力を繰り返してきたと思います。そのたびに波に飲まれたり、風に吹き飛ばされたり、負傷したり、自分の思い描く結果が得られずに、いらだったり苦しい思いを何度もしました。



左から、妻 寛子さん、次男 吾郎さん、夏樹さん、三男 多蒔さん、長男 寛さん、長女 小夏さん

そのような訓練の結果、自分の思いはずいぶんと砕かれて、何となく自然に従えるようになってきました。自然の前では、わがままが駄目なのです。へりくだるしかないのです。「いつも風に耳を傾けて、落ち着いて待つ。」その姿勢が結局は一番であることを知りました。信仰に出会って歩み始めたとき、本当に、この「自然との付き合いに似ているなぁ」と思いました。見えない風との付き合いは、本当に見えないイエス様との付き合いそのもののようでした。癌だと知った時、「人の一生は、霧のように現われては、消えていくものだなぁ」と、そのはかなさをつくづく実感しました。

以前、選手の頃はレースのために世界中旅から旅の連続で、3週間と一つの国に居られない生活が、何年も続きました。はじめの1～2年は楽しいのですが、そのうち引越しの連続のような、落ち着かない毎日が、つくづく嫌になりました。今は、仕事を持ってグアムに落ち着いたつもりでも、やはり「この世では、寄留者なんだなぁ」と、思いました。この世に永遠の安らぎはないのです。「仕事のことなども、どんなに力を注いでも、こころざし半ばで、他の者に譲り渡して行く…そんな者なのだ」と認めました。聖書の言葉を通して、また兄弟姉妹たちの証しを通して、このようなことは、以前から知っていたはずでしたが、実際自分が体験してみないとわからないものでした。

また病のことも、「受け入れた」と言っても、人の心とは、複雑で移ろいやすいものです。10時間におよぶ手術の後、いろいろなチューブに繋がれ、耐え難いひどい痛みを経験しますと、肉体的にも精神的にも本当に弱められました。そんなときには、「癌を与えられて感謝です」とは、とても言えない自分がありました。痛みや吐き気が激しくなると、必死になって、「イエス様、イエス様、…」と呼び求めるのですが、吐き気などが去ってしまい、少々痛みも治まりますと、イエス様のことより、愛する妻だったり、漫画の本だったり、音楽だったり、不安が波のようにやって来ることもありました。

肉体の痛みを知ることにより、今度は「死」というものを、もっと身近に感じるようになりました。人生半ばで突然取り去られると思うと、とっても恐ろしくなります。大げさに聞こえますけど、「死」というものは本当に怖いのです。それにより、いかに今与えられている「命」が尊いか、ということも知りました。

そして術後、少し容態が落ち着いてきますと、今度は嫌な夢を見るようになりました。癌細胞と正常細胞が、戦場の中で戦ってる夢で、ハッとして朝起きるのです。イヤ～な気分です。一日のスタートが自分の命を脅かされて始まるのです。本当に気が滅入る夢でした。「あと5年、いや10年、15年、妻や子どもたちと共に生かしてください」と、主に涙ながらに、子どものように祈りました。そんなときに心に入ってきたのは次のみことばでした。

恐れるな。わたしはあなたとともにいる。（イザヤ　41・10）

「恐れるな」このみことばは、聖書の中で繰り返し語られています。今までは、これを読んでも「ふーん」といった感じで、それが、このときには心にズンと入ってきました。「そうか。自分は、あれこれ考えて、終わりのない思い煩いをしていた。癌になった過去のことに縛られ、また、いつか訪れる『死』という恐れに支配され、がんじがらめになっていた。『今』を生きていなかった」と。「そうか、恐れることはないのだ。家族のことも、すべて主が責任をとってくださるのだ。自分が心配する必要はないのだ。そして、癌になった自分も許せないことはないのだ。イエス様が赦してくださったのだから、そんな自分を許して受け入れて、恐れずに、今日を生きれば良いのだ」と。また、はじめの思いに立ち返ったのです。心がとても軽くなり、平安に満たされました。それからは、毎日このようなネガティブな思考が顔を出すと、「恐れるな。イエス様が、

何とかしてくださる。」と、つねに自分に言い聞かせています。足元のよろけた私にとって、この作業は、どうやら毎日しなくてはいけないようです。

そのようなものを求めて、イエス様のことを忘れている自分もいるのです。そこでまた、「自分は、ちっぽけだなぁ」と気付かされました。「ニワトリが鳴く前に、『イエス様のことなど知らない』と、私も言ってしまうだろうなぁ」と、つくづく無力さを知りました。「イエス様のために、何かしたい！」と燃えていても、その実、本当のところはそんな者なのです。たいした者ではないのです。

このような病が与えられる前は、自分の一生がいつまでも続くものと、ある意味退屈さとしんどさを感じているときもありました。「一日一日を生かされて歩む」と思いつつも、惰性になっていました。それが、この病は「人の一生には終わりがある」ということを、35歳の働き盛りに身をもって教えてくれました。試練とは、物をはっきりと見せてくださるメガネのようです。それまでは大切なことと、そうでないことなどがぼやっとしていましたが、この試練は、本当に大切なことをはっきりと見せてくださいました。「残された日々を、主のために生きたい」との思いも大きく膨らみました。

そんなとき、集会のあるお方が書かれた著書の中の文章を思い出しました。「あなたが将来召されて、主の前に立ったとき、自分の一生を振り返ってみて、主のためにしたと思っていた多くのことが、あれもこれも実は自分のためにしたことに気づかされるでしょう」と。思わず納得して、苦笑いをしてしまったことを覚えています。そうです。いくら終わりを感じたとしても、自分の思いで頑張ったところでは、的外れなのですね。私は、ただの器でしかないのですから、器が頑張っても駄目なのです。本当に私の思いに比べて、主の思いは、高いところにあるのでしょう。「ただ御霊によって動かされるのが一番である」と、つくづく思います。「何かをする」というのも価値あることですが、「主とともにある」というのが、大切なのでしょう。

いろいろ振り返りますと、自分はずいぶん堅くなっていたなぁ、肩に力が入っていたなぁと思うのです。選手生活のこともそうです。スポーツ選手に、強い憧れはあったのですが、本来の私は、見かけと違って精神的にそれほど強くなく、人と争うことをあまり好みません。とてもプロとして、ワールドカップという高いレベルを楽しめるタフな心を持ち合わせていないのです。小さい頃は、中学生くらいまで、精神的なもので毎日下痢をしていましたし、競技者になって、ワールドカップを転戦するようになってからは、これが不眠に変わりました。眠っていないわけではないのでしょうが、明日のレースのことなどを思うと、神経がピリピリ緊張してしまって、眠った気がしないのですね。でも、レースは、やって来ますので全力を出します。そんなことが長く続くと、自分が疲れているのかどうかも麻痺してしまって、わからなくなるのでした。この不眠は、レースを離れて、8年くらい経った今でも続いています。

それが、不思議なことに癌の兆候が現われた頃から、自然とよく眠れるようになったのです。病院でも、とってもよく眠れました。結局手術の日の朝まで、それは続きました。はじめて大きな手術をする者にとっては、これは本当に感謝なことでした。眠れないと疲れますし、いろいろなことを考えてしまいますから。そして、術後はまた今まで通りに戻っています。

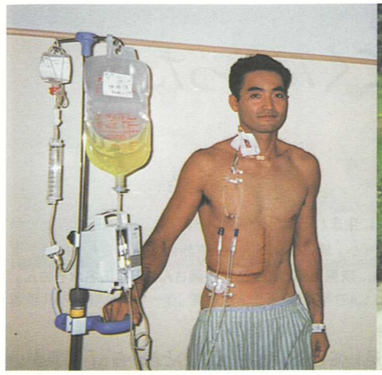
主は、必要なときに、必要な力を与えてくれました。主の恵みや試練は、その辺の既製品ではなく、一人一人にピッタリ合ったオーダーメイドの服のようです。全てが、最善で益となっていたことが、振り返ったときに分かります。つねづね「自分の思いを持たないように」と祈ってきています。信仰を持った今は「主に用いられたい、渇いた魂を導きたい」と願うのですが、私は人と一緒にいることに緊張してしまって、どうにも居心地の良さを感じない性質もあります。それらのことも、私のことをいつも気にかけてくださる主の目から見ますと、私には十分であると思います。すべて主は、ご存じで最善なのです。

癌という病は、本当に不思議です。まだ医学で解明されていない、誰でもがかかる恐れがあるということなどが、人を不安にさせるのでしょうか。「癌に効く」といわれるいろいろな治療法や、健康食品、それに関する著書が、ちまたにあふれています。確かに、治っている人もいれば、苦しむだけで効果のない人、さまざまです。怪しげな治療や薬も、99人に効かなくても、もしかしたら、自分には効くかもしれない。また、自分に効けば、それが最良の薬であって、科学的な根拠などいらないのです。「手術をした方が良い」という人もいれば、「しない方が良い」とか、「抗癌剤は、副作用が苦しいだけなのでしない方が良い」とか、まったくさまざまです。周りの人たちも、善意で「これが効く。あの病院が良い」といろいろなことを教えてくれます。ときに、それが光になって、ありがたいこともあります。しかし、この中でどれが自分の命を延ばせるのか、分からないのです。そして命は1回きりです。いろいろな本を読んだり、アドバイスを受けたり、熱心になり、自分の命にしがみつくと、だんだんと心が平安でなくなりました。

自分にとって大切なことであればあるほど、本当のことを知りたい思いが強くわいてきます。「自分に起こったことの本当の意味は、何なのだろうか?何をいったい信じたら良いのだろうか?この問題の解決方法は、いったい何なんだろう?」思いを巡らした結果、結局は聖書のことばに行きつく自分がいるのです。

1990年、フランスのワールドカップのセレモニーに日本代表として







（左）病院で、（右）手術後、軽井沢で。右から2人目、寛子さんの母・福田名水子さん

あなたがたのうちだれが、心配したからといって、自分のいのちを少しでも延ばすことができますか。　（マタイ　6・27）

聖書のことばに、自分がまっすぐにされるというか、「やっぱりこれだなぁ」と心から納得する自分がいるのです。そのことばは、昨日も、今日も、明日も変わらないことばです。心に思いを超えた安らぎが広がります。そして、その心の平安によって、主が今も生きておられるということを知るのです。一時的な延命療法ではなく、「永遠の救い」なのです。そしてこの聖書の語る「永遠の救い」のすばらしいことは、誰にでも効くということです。あの人は効くけど、この人には効かないということがないのです。誰でも、心開いて主を求めれば、それで永遠のいのちが与えられるのです。しかも、ただです。まだ、聖書に出会ってない方には、しょせんクリスチャンだから、何でもそこに解決を持って来るのだと言うかもしれません。何か現実逃避のような弱さを感じることでしょう。以前の私も、そう思ったでしょうから。強かったですから。あまり自分の弱さに出会ったことがありませんでしたから。でも、人は弱い者なのです。迷う者、永遠を求める者なのです。そして、本当に自分の力では、どうしようもできなくなったとき、人は何かに頼りますし、何かに祈りたくなるのではないでしょうか。その対象は、やはり本物である必要があると思います。人間では駄目なのです。お医者さんも決して万能ではないし、家族も友人もそうです。人間の造りあげた「宗教」という神でも、限りがあるでしょう。やはり万物を造りあげた創造主、聖書の語る「唯一の神」と言われる方以外にはないでしょう。そして、今回その方は、癌になった私にこう語りかけてくださいました。それは、本を買おうと書店のレジに立ったときでした。ふと、壁にかかった文字が目に映りました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。　（ヨハネ3・16）

レジでお金を払いながら、涙があふれ出てきました。「あぁ。一人として滅びないんだ。永遠のいのちを与えられているんだ。捨てられはしない。ひっそりと忘れられて滅んでいくわけではない。このような者のために、イエス様は十字架についてくださった。」ということを、改めて教えてくださいました。それは辛いとか悲しいとかではなく、感謝があふれ出したような、不思議な、今まで味わったことのないような涙でした。本当に、聖書のことばは生きていて、どんな励ましの言葉よりも力があると、改めて実感しました。

また一昨日のことですが、再入院から退院するその朝のことです。ベッドの上で目が覚めたとき、イエス様が本当にそこにいてくれる安堵感を覚えました。心の底から祈りがわき出てきました。それは、今までにはなかった、とても自然な祈りでした。そこにいらっしゃるイエス様との会話でした。主の臨在を感じました。そして、「この方といつも一緒にいたい。」と心から願いました。

終わりに、大きな試練を背負っている方、人生に虚しさを感じている方、病の中にいる方、愛する者が病の中にいる方、現実は、毎日辛いと思います。希望が見えないと思います。でも、今の苦しい状況に、泣きながら笑う方法はあるのです。そのような辛い思いから、解放される方法はあるのです。喜びに満たされて、静かに生きるすべはあるのです。弱っているようでも、力強く生きられる方法はあるのです。それは、むずかしいことではありません。頑張って賢くなる必要もないのです。それを得るには、ただ子どものように、素直になることです。そして、イエス様を呼び求めていただけたらと思います。そうすれば、思いを超えた平安が心に広がります。あなたは罪が重いから駄目とか、そんなのじゃないのです。病の中で、ベッドの上にいて、何もできなくても大丈夫なのです。イエス様はこう語ってくださいます。

「わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます。」　（マタイ　11・28）■

すべての事柄の裏側に、主がいてくださった

飯島　寛子

1967年東京都目黒区に生まれる。目黒三中、桜町高、文化女子大卒。大学在学中に学生結婚ハワイへ。現在グアム在住、家族は夫夏樹さん、長女小夏さん、双子の長男寛さん、次男吾郎さん、三男多蒔さん、母福田名水子さん。

愛する夫が突然癌という病で倒れたこの数ヶ月は、まさしく明日のことも分からない日々で、厳しくて辛くて、とても喜べる状態ではありませんでした。ただひたすら、一日一日一歩ずつ進むのが精一杯で、あたかもそれは、先の見えない霧の中を歩いているような状態でした。ただその霧の先には山があり、気がついたら山頂に向かって歩いていて、数ヶ月たった今、その霧も薄くなり、時々山頂が見えつつあります。

それは、1枚のファックスから始まりました。母の日の朝、義父の見舞いに日本へ行っていた夫からのファックスでした。「人間ドックの結果、肝臓に7cm大の腫瘍が見つかり、すぐに検査する必要がある。」という内容でした。母の日に送られてきた嬉しい手紙かと思って読んだ私は、がく然としました。ただ、「イエス様どうしてですか?」という気持ちは不思議となく、「ああそうですか」と受け入れるような気持ちでした。それでも夫が帰ってくるまでの1週間は一番辛かった、と今でも思い起こします。頭の中が混乱して涙がとまりませんでした。「光よあれ」の、病気で先に召された方の証しと、癌関係の本などを読みふけり、先のことばかり心配して、証しをしている方のようにみことばは示されず、悲しみでいっぱいになりました。今まで大切だと、とらわれていたいろいろなことが、全然たいしたことに感じなくなりました。愛する夫が、すぐに召されると思ってしまったので、「私も家族も全員一緒にイエス様のところに行きたい」と思いました。

ある姉妹から「一番悲しんでいる方にあげてください」といただいた、みことばのプレゼントを、私がいただくことにして、中味を開けました。

あなたがたの悲しみは喜びに変わります。(ヨハネ 16・20)

みことばは完璧と知っていますが、そんなこと受け入れられない、という気持ちでした。

ここで少し、私の生い立ちをお話します。私が5歳のときに父が蒸発してしまい、母と祖母と姉の女ばかりの4人家族で育ちました。商店街の長屋に肩寄せ合って暮らし、お嬢ちゃん育ちの母が、生活のために雀荘のママを任されて男勝りに働き(その後、証券会社に転職)、祖母は50歳で山口から上京して呉服屋を営んでいました。とてもパワフルで家族仲良く愛のある明るい家庭で、私は満足していました。子どものときから、「父親がいないのに明るいね」とよく言われていましたが、心の中では「何のために生きているのか」といつも考えていました。

私は何につけても「普通」に憧れていましたが、私の家は普通ではありませんでした。親戚はいわゆる女系家族で女性が強く、離婚経験のない人はいないくらいで、当時はめずらしい家系でした。母からは「男は信用してはいけない、男は請求書を持ってくるだけだから、女は手に職つけて生きていくのが一番いい」と言い聞かされていました。私も素直にそれを信じていましたので、結婚願望はまるでありませんでした。

ところが、大学時代に趣味のウィンドサーフィンを通じて、主人に出会いました。初めて出会ったときの彼の印象は「太陽のような人」でした。この世に信用できる男性もいたのだとびっくりしました。すぐに直感で迷いもなく、学生結婚しました。(今思えば、イエス様が導いてくださったのでしょう。)

その当時、彼はプロのウィンドサーファーをしていましたので、ワールドカップのために世界中旅する生活が始まりました。長女が生まれるまでの4年間、世界中どこへ行くのも一緒で、ハワイを拠点にすてきな生活をしていました。スポンサーにより生活は支えられ、世界で日本を代表して戦う選手である夫を偶像にして、私も彼に追いつけと一流スポーツ選手の良き妻を目指して全力でがんばっていました。夫には心から仕えていました。そして他の誰にも負けたくないと、とても高慢な私でした。「夫の夢が自分の夢」で、夫が自分の誇り、偶像でした。

夫は現役を引退して、ハワイからグアムに移り、仕事を始めてからも良き夫でした。その頃、私達は道に迷い飢え乾き、真理を求めて「聖書」に出会い、いくつかの教会を経てキリスト集会へと導かれ、救われました。みことばに出会い、それまで自分の努力で建ててきた家庭が、主によって建て直されていき、少しずついろいろなことが明らかに示されました。

私は、のんびりとしたどこででも眠りこける性質で、夫はせっかちで時間に几帳面で、いつも急ぎ足で、異なる性質を持っています。生活の中で、いつも夫からプレッシャーをかけられる苦しさがありました。それでも、私は誠実な夫に絶大な尊敬と信頼を置いていました。そのような「私の偶像」である、働きざかりの



西軽井沢福音センターで、寛子さんと三男 多蒔さん

一家の大黒柱である夫が、いきなり癌で倒れたのです。

入院中、まだ主に出会っていない義理の兄姉には、本当に助けられました。それまでは疎遠でしたが、義父の死に伴ういろいろなことによって、自分の愚かさ、高慢さに気づかされ、心から悔い改めることができました。また、義母に対してもそうでした。「まったくダメな私ですが宜しくお願いします」と、不思議とへりくだる思いが与えられました。それから思いを超えた良い関係が築かれつつあり、家族の大切さを身にしみて感じました。しかし、その間本当に苦しいとき、イエス様の姿が見えなくなりました。私にとっていつも最善を与えてくださるイエス様を知っていながら、そこには、なかなかたどり着けませんでした。日常生活での子ども達の存在や、義兄姉や実姉の多くの助けによって、とても励まされ、反面、そのときは同じ信仰をもつ方々にいただいたみことばは生きて働かれず、よそよそしく冷たく感じられました。そして、日本にいながらグアムの会社の雑用をしているときは、辛くて悲しく感じられ、肉体も精神も疲れてギリギリでいました。全然心の中では、主にお任せしていませんでした。頭の中は空っぽでした。ただ、子どもを連れて病院で主人と会っているときは、なぜかとても輝いているときで、「今が一番いいときだね」と語り合っていました。愛する夫が主に満たされて主のご栄光の中にとどまり、それにより私も主に一番近づいているときだったからだと思います。今まで執着していたグアムの家や仕事などは、台風で吹き飛んでしまっても良いとまで思いました。大好きだったグアムへの思い入れも薄れ、家族一緒に平安に暮らせたら、病院でもどこでもいいと思いました。大切なものは、本当に少ないと示されました。とにかく夫には、ボロボロでもなんでもいいから、生きていてほしいと切に願いました。

義父の死の知らせを受け、一家で荷物をまとめてグアムから日本へ慌てて飛び出し、義父の葬儀、いろいろな雑用、一家の大黒柱の夫の入院、癌の宣告、10時間に及ぶ手術、退院、療養、再発、再入院を経て、3ヶ月ぶりに台風で荒れた家にたどり着きました。「みこころのままになりますように」と祈っていましたが、霧の中を足元だけ見て歩いていたので、何がみこころか良く分かりませんでした。とても家族そろってグアムに帰れるとは思っていませんでしたが(最悪の状態を考えていて、自分のことを守っているようでした)、イエス様はすべてのことを完全に導いてくださり、一度家族そろってグアムに帰らせてくださいました。

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを耐えることのできないような試練に会わせるようなことはなさいません。むしろ、耐えることのできるように、試練とともに、脱出の道も備えてくださいます。　(1コリント　10・13)

後になって、すべての事柄の裏側に、主がいてくださったことを気づかされます。日本にいた期間は、ちょうど子どもの夏休み中であったこと、夫の主治医が同じ信仰を持つ信頼できる兄弟であること、入院中まだ手のかかる長男次男三男が保育園に入園できたこと、長女は小学校に体験入学できたこと、手術前の外泊許可で集会の兄姉と交わりが与えられたこと、同じ重荷を背負う子沢山の奥さんと涙を流しながら礼拝に導かれたこと、療養中に住むところを御代田に与えられたことなど—。少しずつイエス様は、必要な力、日常生活をする力を与えてくださいました。グアムでは、留守中の家が台風の影響で水びたしになり、小型トラック4台分の家財道具を処分しました。

自分の宝を地上にたくわえるのはやめなさい。そこでは虫とさびで、きず物になり、また盗人が穴をあけて盗みます。自分の宝は、天にたくわえなさい。そこでは、虫もさびもつかず、盗人が穴をあけて盗むこともありません。

(マタイ　6・19、20)

今は、グアムで静かな家族での日々を過ごしています。夫がいらいらすることもまったくなくなり、今までにない安らかな日々で、新しく生まれ変わったようです。そして夫の変えられた姿の中に、以下のみことばを見るのです。

私はキリストとともに十字架につけられました。もはや私が生きているのではなく、キリストが私のうちに生きておられるのです。　(ガラテヤ　2・20)

でも、弱い者で、目の前に霧がかかって山頂が見えにくいことが、ときにあります。夫が毎月検診で日本へ行っているときは、不安が襲ってきますし、いろいろな、もっともらしい人間的な言葉に惑わされたりします。そのようなときは、満たされた夫と比べて、私とイエス様の関係は、自我がじゃまして、あまり良いものではないのです。イエス様は、私の願いではなくて、私に必要なことを与えて下さるということも、知ってはいるのです。あてにならない自分を知ることは本当に難しいことです。自分を自分以上にご存知である大いなるお方がなさることは、完全であると、信じきりたいと切に望む自分がいますが、毎日古き自分との戦いの連続なのです。

この御言葉によって、現在ささえられ、少しずつですが、主と共にある者と変えられているようです。

あなたがたの悲しみは喜びに変わります。(ヨハネ 16・20)



ハレルヤ！

2002年10月13日に開催されたメサイアコンサート
渋谷のBunkamuraオーチャードホールにて

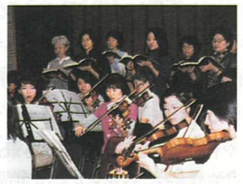
感動呼んだ賛美の響き

2002年「メサイア」東京公演

「アーメーン　アーーーメーーーーン」力いっぱいの賛美が終曲を締めくくったとき、会場は鳴り響く拍手とともに深い感動に包まれていました。2002年10月13日、東京・渋谷のオーチャードホールで開かれた、キリスト集会有志の混声合唱団・管弦楽団による「メサイア」コンサート。聴衆の方々、合唱団やオーケストラのメンバー、指揮者、それぞれの目に光るものが見られたのは、音楽を通して伝えられたイエス様の愛、賛美する喜びに心が揺さぶられたためではないでしょうか。入場者はほぼ満席の1988人。祝福された演奏会でした。







キリスト集会のメサイア公演は今回で8回を数えますが、初めて聴きに来られた方も少なくなかったようです。来場者からは次のような感想をいただきました。「ヘンデルのこの曲は何度も聴いていますが、『メサイア(救い主)に出会った』と感じたのは初めて。衝撃的なコンサートでした」(若い婦人)、「合唱団の一体感と気迫、喜びの表情が印象的で、不思議な感銘を受けました」(中年男性)。そして、合唱団の中からも「ハレルヤ・コーラスになったら涙がとまらず、しっかり歌えなくなってしまいました」(初めての参加者)という声を聞きました。

この楽団は、正式な名称をブルーメンシュトラウス混声合唱団、ブルーメンシュトラウス管弦楽団といい、音楽を通してイエス様を紹介したい、イエス様を賛美したい、という思いで一つにまとまった集団です。ブルーメンシュトラウスは「花束」を意味するドイツ語です。今回の出演者は独唱者4人、合唱団250人、オーケストラ55人という大編成になりました。コンサートは来年も、再来年も開きます。ぜひ聴きに来てください。2003年のコンサートは11月3日東京の府中の森芸術劇場で開きます。

オラトリオ
G.F.ヘンデル作曲「メサイア」

ブルーメンシュトラウス混声合唱団
ブルーメンシュトラウス管弦楽団

Messiah

G.F. Händel G.F. Handel.







練習と奉仕

メサイア公演の裏には、長期の練習とたくさんのご奉仕があります。今年の練習は5月にスタート。毎週日曜日の午後、吉祥寺キリスト集会所で各パートの練習や全体練習を重ねてきました。女声合唱の人たちは火曜日にも練習をしてきました。この間、7月と9月に1泊2日の合宿練習を、西軽井沢国際福音センターと福岡で行いました。合宿では、キリスト集会の仲間の方々が、お弁当やお茶の準備をしてくださいましたし、リハーサルや公演当日には、チェンバロ、ティンパニー、コントラバスなどの運搬、会場準備、入場者の案内、電光掲示字幕の操作など、さまざまな裏方の仕事を喜んで担ってくださいました。演奏会のチケット、チラシ、当日配布するパンフレットなども、毎回ご奉仕で作成されています。

天から贈られた音楽

「メサイア」は、バッハと並ぶ後期バロックの大音楽家、G.H.ヘンデルが作曲したオラトリオの傑作です。救い主出現の預言からイエスの誕生までの第1部、イエスの十字架の死と復活・昇天を中心にした第2部、死への勝利と御座につかれた主を賛美する第3部で構成される全53曲の大作で、これをヘンデルは24日間で書き上げました。有名な第44曲「ハレルヤ」を作ったとき、彼は「諸天が目の前に開け、神ご自身もそこにおられるのを見た」と告白したそうです。「メサイア」こそ、まさに主の導きによって生み出された「天からの贈り物」と呼ぶにふさわしい曲でしょう。



KAKUCHI NO SYUKAI KARA

各地の集会から

こちら大阪集会で～す

from OSAKA

皆さま、こんにちは。今回は大阪集会の自己紹介をさせていただきます。

私たちの集会が歩みだしたのは1994年3月。それまで関西には神戸集会（今の芦屋集会）しかありませんでしたが、「大阪でも」という導きがあり、大阪方面に在住の30人ほどが神戸集会から離れて、新たな集会をおこしたのです。当初は堺市の最南部、光明池の公共施設を、礼拝・福音集会に利用していました。しかし、駐車場の制限などの問題があって、もっと集いやすい場所を、と祈ってきました。そして2年前、大阪市内と八尾市内に現在の礼拝場所が与えられたのです。どちらも駅から徒歩数分という便利さ、駐車場にも恵まれていて、感謝しています。

この間、集う人も増え、今は大阪、京都、奈良、和歌山各県から毎週50人前後が集っています（まれに出てくる人も数えると、合わせて100人になります）。その中には障害を持った方もいますが、いつも賛美を喜んでいる姿に、主のすばらしさを思わされます。

集会の歩みを通して、主の祝福を数多く体験して来ましたが、とくに近年の「大阪よろこびの集い」がそうでした。毎回、新しい参加者が増やされていますし、会場を確保できずに開催が危ぶまれたとき、祈って探しに出たら10分後に与えられたことがありました。今年は、手違いで宿泊所の半分を他の団体に予約されてしまったのですが、よろこびの集い開催の直前にキャンセルされて事なきを得ました。

日曜日ごとの礼拝・福音集会のほかには、祈り会、家庭集会、交わり会などを行っています。それぞれについて以下に紹介しましょう。

●礼拝/福音集会

毎日曜日の午前10時に集まって祈り会、10時30分から礼拝を1時間。11時45分から福音集会(メッセージ)。その後は各自が持ち寄りで食事の交わりをして、2時ごろに自然解散します。毎月第3日曜日には和歌山市でも礼拝を行っています。

●子ども集会

子ども集会は、福音集会と平行して、別室で行っています。少ないときは2人多いときは7人ぐらいと、週によって参加する子の数はまちまちですが、とにかく毎週続けています。聖書のお話しのほか、パソコンのお絵かきソフトで紙芝居を作ったりしています。純粋な子どもの発言に、大人が教えられることもあります。

●家庭集会

メッセンジャーの方が土曜日から泊りがけで来てくださるとき、家庭集会を行っています。現在、大阪市内（2ヶ所）、富田林市、八尾市、奈良県生駒市の5家庭が順番に、場所を提供してくださっています。

●祈り会

八尾市と堺市のお宅で毎週水曜日午後、祈り会を行っています。

●交わり会

家庭集会のない週の木曜日もしくは金曜日、大阪と生駒のお宅で交互に朝10時30分から開きます。メッセージの録音テープを聞いた後、食事を共にして親しく語り合うときを持ちます。引退した人や自営業の人が多いせいか、平日の午前にもかかわらず、男性の参加者が少なくありません。

大阪集会の最新のスケジュールは、下記のホームページで見られます。
集会広場ホームページ　http://web.ffn.ne.jp/~hiroba/

（広田裕彦）

ごいっしょに祈りましょう。

「実を結ぶ命」中国語版の現地印刷について



多くの国で読まれ、広く主に用いられている「実を結ぶ命」は、中国語訳の原稿も立之英正さん（相模原キリスト集会）の手で完成しています。しかし、中国語版はまだ発行されていません。現地印刷が実現して、多数の中国人に福音が伝えられるよう、祈りましょう。

結婚・葬儀のご報告

主よ。あなただけが、
私を安らかに住まわせてくださいます。
（詩篇4・8）



7/20
印部 孝・あづさ

7/21 廣瀬 努・優子





8/18
佐藤 弘康・野ゆり

Wedding
結婚式



8/24 関口 真介・淳子



8/23
吉田 満・雅子

5/30 近藤 良三
6/21 横溝 静子
6/22 京嶋 幸男
6/28 岡崎 とめ
7/01 猪飼 きく
7/03 内田 賢三
7/16 富永 弘
7/29 桶田 モト
8/02 下村 松太郎
8/06 江熊 桂
8/15 儀間 千代
8/17 高元 ハルエ
8/27 鐵 清六
8/29 粟飯原 万里子
9/05 志津野 英雄
9/10 岡本 さら
9/25 国場 侑子
9/27 田部井 雅章
9/28 樋口 直子





Funeral
葬儀

私たちの住まいである地上の幕屋がこわれても、
神の下さる建物があることを、私たちは知っています。
それは、人の手によらない、天にある永遠の家です。
（2コリント5・1）

祝福の36時間

今年の正月、福岡集会の別所諄之さんは、とんだ体験をしました。西軽井沢国際福音センターの「よろこびの集い」からの帰途、大雪に見舞われて、なんと36時間の長旅を強いられたのです。

長野県御代田町の福音センターをスタートしたのは2日正午。前輪駆動、普通タイヤにチェーンを装着した車は時速35km、スクーター並みのスピードでした。やっとのことで長野県を抜けたら、こんどはチェーンが切れて大ピンチに。たまたま路面の雪が少なかったので、ノロノロ運転を続けましたが、進むうちに雪は多くなってきます。下り坂だったのを幸いに、なおも走り続けましたが、しだいに心もとなくなり、危険を感じて「パーキングへ入れますように」同乗者全員で祈りました。と、ほどなく「内津峠PAまで1km」の標識。主に感謝しました。

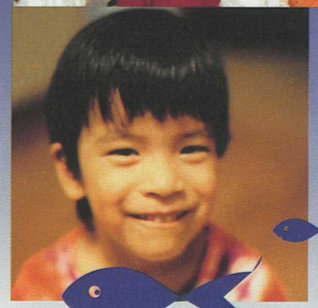
しかし、これからどうなるのか、先が読めません。道路パトロールの車は「高速道の封鎖」を告げ、JAFの助けも得られません。八方ふさがりの状態になりましたが、

PAでは屋根つき駐車場が与えられ、雪を避けて一夜を明かすことができました。そして翌朝6時にはPAの職員が来て、国道なら通れそうなこと、岐阜羽島までの道などを親切に教えてくれました。

試練はその後も続きましたが、道に迷うと教えてくれる方が現れたり、間一髪のところで事故を免れたり、ガソリンスタンドでは最後のスタッドレス・タイヤを購入できるなど、そのたびに守られました。そして、九州の人間には見たこともない美しい雪景色を満喫？できたことも大きな恵みだったそうです。こうして福岡県久留米市の自宅にたどり着いたとき、時計の針は4日午前零時を回っていました。

それにしても36時間もかかったとは。航空機なら日本とドイツを往復できる時間です。さぞ、うんざりしたのでは、と思いきや、「主のご栄光を見たドライブでした」、「主はいつも共にいてくださいました」と、思わぬ体験をむしろ喜んでいました。




あおぞら

天国への思い

むかし、結婚式でお祝いのことばをお願いされて、「結婚式よりも、お葬式に招かれたときのほうが、うれしいです。」とお祝いをはじめ、みんなをびっくりさせたクリスチャンのおじさんがいました。

でも、おじさんはきっと子どものような心で、心のそこからそう思ったのでしょう。天国へのあこがれは、みんなの心の中にあるのではないでしょうか。その天国が、本当に身近になるときって、どんなときなのでしょう。

先日、親しかった女の子の葬式に出席しました。

イエスさまが、天国に召してくださったのです。

親しい人たちが天国に召されるとき、私たちは、天国を身近に感じるようになります。

そして、イエスさまこそがすべてのすべてということを、また新しく、教えていただけるのではないでしょうか。

そうぎで よまれた おともだちの おてがみから

天国にいるSへ

S、天国はどんなところですか？

うまれた時からずっといっしょで、

Sが、こんなにはやく天国にいくなんて、

考えてもいませんでした。

Sが召されるまで私は、死や天国について、

考えたことがありませんでした。

Sが召されてから、ほんとうにたいせつなもの、

だいじなものは何かと、考えさせられました。

イエスさまをしっているということは、

何にもかえられない幸福だと、

ほんとうに思わされています。

それは、『死は終わりではない』と、

確信できるからです。

おおくの人は、(こんなに若いのに。)とか

(お気のどく。)とか、思っていることと思います。

私は、Sにたいして、

まったくそういう感情はありません。

Sとはこの地上であえないし、さびしくて、

さびしくて、しかたがないけれど、

Sはいま、私たちが体験したことのない、平安で、

いちばん美しい場所にいることを、

こころから確信できます。

Sが召されたことをとおして、おおくのひとの

証しになるように、こころから、いのっています。

そして、イエスさまが私に、Sというひとりの

姉妹を、であわせてくださったことを、

こころから、かんしゃしています。

そうぎでの おとうさんの ごあいさつから

4日まえに、かのじょが私たちの前から取りさられたあと、ほんとうにぽっかりと、心にあながあきました。子をうしなうというのは、ほんとうに、こういうことだったのかと知りました。

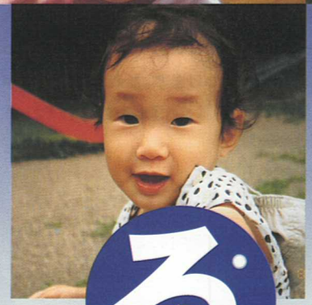
今、ことばにすることができませんので、ひとりのキリスト者の詩を、お読みしたいと思います。

かれは47年間寝たきりで、声もだせずに、まばたきで、この詩をうたいました。

主よ　なぜですか
父につづいて　母までも
みくにへと　召されたのですか
なみだがあふれて
主よ　主よ　と
ただ　よぶだけで
つぎの　ことばが　でてきません
主よ　あなたも







らひろば

私といっしょに　ないてくださるのですか
母をうしなった私のために
なかないでください
こころのなかは　ふしぎなくらいに
しずかなのです
キリストが　私とともに
おられるからでしょうか
(詩:水野　源三)

私たち夫婦も彼と同じように、悲しみと、そしてふしぎな平安の、ふたつの思いが、ともにあたえられています。

長女が召された日、びょういんで次女が私にききました。

「お姉ちゃんは、天国にいったの？」

「まちがいなく、天国だよ。」

私がこたえると、この子も、こころから

「よかった…。」

と安心することができました。

再会のきぼう、永遠のいのち。ここに、たしかな希望が、また、たしかな土台があります。

しばらくたって おとうさんが おはなししてくださったことから

葬儀の日、私のこころの一部は、まだ悲しみに支配されていました。しかし今は、悲しみよりも喜びについて、もっとたくさんおはなしした

いと、思うようになっています。

むすめを召されて、神がひとり子を死にわたされたこと、すなわち『イエスさまの私たちへの思いのふかさ』を新たに覚えるようになりました。

『愛する者の死』以上に神が望んでおられる、たいせつなことがある、ということです。神がひとり子をお与えにならなければ解決しなかったほどの『私たちの罪のふかさ』と、神がひとり子を与えてくださったほどの『私たちへの愛のふかさ』です。

いまから私たち家族に与えられようとしていることは、むすめの死以上の価値があることにちがいない、と思うようになりました。

確信できることがふたつあります。

そのひとつは、葬儀で申しあげたとおり、『天国へのかくしん』です。

もうひとつは、『ひとつになることの喜び』です。

そしていま、家族がほんとうに、ひとつになろうとしています。

オートバイに のった みことば

死に至るまで忠実でありなさい。そうすれば、わたしはあなたにいのちの冠を与えよう。
(黙示　2･10)

これは、Sちゃんより何年か前に召されたCさんが、病床に書きのこした聖句です。

生前のCさんは、オートバイが好きで、あの大きなハーレー・ダビッドソンを乗りこなすほどでした。Cさんの記念会には、100人以上のなかまたちが、オートバイやバスでやってきました。

そしてみなさん、聖書のお話を、すなおにうけとめておられました。後日、オートバイに乗る彼らのTシャツに、Cさんの書きのこした聖句が、英文で染めこまれているのが見られました。

神は、実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛された。それは御子を信じる者が、ひとりとして滅びることなく、永遠のいのちを持つためである。(ヨハネ　3･6)

ああ、その朝。ああ、その朝。救い主に、
我ら会わん。　(聖歌630番)

子どもたちの写真や★エピソード、お待ちしてます!!

原稿募集　各地で日曜学校のお世話をされている方々、また子育て奮闘中の皆様からの原稿をお待ちしています。(子どものプライバシー保護の意味合いも含めて、基本的に執筆者、エピソード提供者の名前は載せません。)子どもたちの、ふしたつぶやきから教えられたこと、ドキッとさせられたこと、思わず吹き出してしまうような、ユーモラスなエピソードなど、お寄せください。なお、紙面の都合上、編集して一部を掲載させていただくこと、全員分をご紹介できないこともありますが、ご了承ください。

送付先　181-0005　三鷹市中原3-1-55　清水洋一
e-mail :yoichi-s@par.odn.ne.jp

神のひとり子でありながら、私たちを救うために地上に下られたイエス様。

ヘンデルのメサイアに、For unto us a Child is born.「ひとりのみどりごが、私たちのために生まれる。(イザヤ9･6)」という合唱曲があります。最初は歌詞で歌い出されるのですが、すぐに喜びのララララ……という音型となって全パートに広がっていきます。これこそ私たちがイエス様のご誕生を思う時の、喜びの気持ちそのものの表現です。

きょうダビデの町で、あなたがたのために、救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。あなたがたは、布にくるまって飼葉おけに寝ておられるみどりごを見つけます。これが、あなたがたのためのしるしです。(ルカ2･11, 12)↗

私たちはこの一節を読むたびに、胸がいっぱいになります。イエス様は、主なる神のひとり子でありながら、人の姿をとってこの地上に来てくださいました。そして、悩む者、苦しむ者とともに生活してくださり、福音を説き、救いの道を備えてくださいました。そのイエス様は、十字架につけられ、血を流して、私たちの罪を赦し、救ってくださったのです。クリスマスは、そのイエス様のご降誕をしのんで、主の前に静まり、救われたことの喜びを感謝し、主を賛美する日です。

聖書が語る福音の中でも、最も大切なことの一つ、「イエス様のご誕生」。

イエス様のご誕生は、聖書の福音の中でも、とびきり大切なできごとです。イエス様は、なぜ神のひ↙

2000年前に、この地上に来てくださったイエス様。
そのイエス様が、再び、来てくださる!

↘とりごでありながら、私たちの住むこの地上に来てくださったのでしょうか。

キリストは人としての性質をもって現われ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われたのです。
(ピリピ2･8)

イエス様は苦しみ悩む人々に福音を説いて回られた後、罪もないのに十字架につかれていのちを捨てられました。そのことの意味については、聖書にこう語られています。

そして自分から十字架の上で、私たちの罪をその身に負われました。それは、私たちが罪を離れ、義のために生きるためです。キリストの打ち傷のゆえに、あなたがたは、いやされたのです。
(1ペテロ2･24)

イエス様は、私の罪の身代りとなって命を捨ててくださった。貴い血を流して、私を罪から贖ってくださった。救ってくださった!
これこそが、イエス様が人の姿をとってこの地上に来てくださったことの意味です。これこそ、主なる神からの最大の贈り物であり、恵みです。

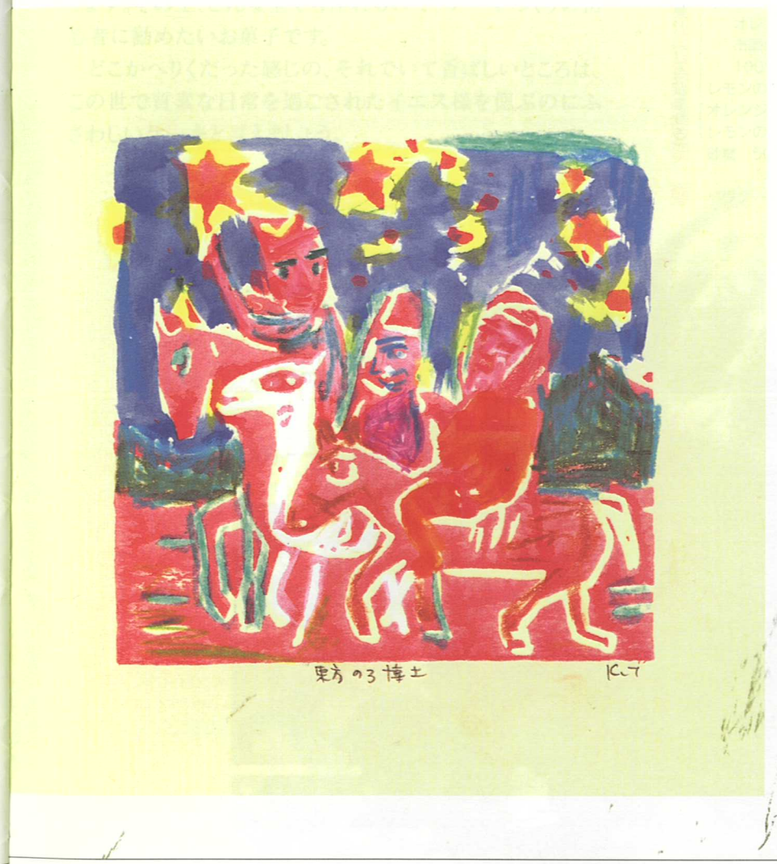
イエス様は、十字架の後よみがえられて、天に上られ、いまも生きて働いておられる。

イエス様は十字架にかかられて後、よみがえられ、天に上り、神の座の右につかれました。そして、今も生きて働いておられ、私たちの祈りに答え、大きなみわざを日々私たちに見せてくださっています。イエス様のよみがえりについては、4つの福音書の終わりのほうにくわしく書かれていますから、ぜひお読みください。よみがえったイエス様は、お弟子たちに現われ、語りかけ、力づけられました。そして、「彼らが見ている間に上げられ、雲に包まれて、見えなくなられた。(使徒1･9)」のです。天に上られたイエス様は、「神の御座の右に着座され(ヘブル12･2)」、今も生きて働いておられます。私たちの信仰が、日々イエス様と結び付けられ、生き生きとしたものになっている↗

↘のは、イエス様が今も「生きておられ」、私たちの祈りに耳を傾け、必ず答えてくださり、その結果を目に見える形として見せてくださるからです。「主は生きておられる!」これこそ私たちの確信であり、希望です。

そのイエス様は、まもなく、再び、来てくださる!

そのイエス様は、聖書に書かれているとおり、まもなく来てくださいます。これが「再臨」です。2000年前に地上に来てくださったと↓



↓きには、人の姿をとり、みどりごとして生まれてくださいました。しかし、2度目に来てくださる時の状況は、次のとおりです。

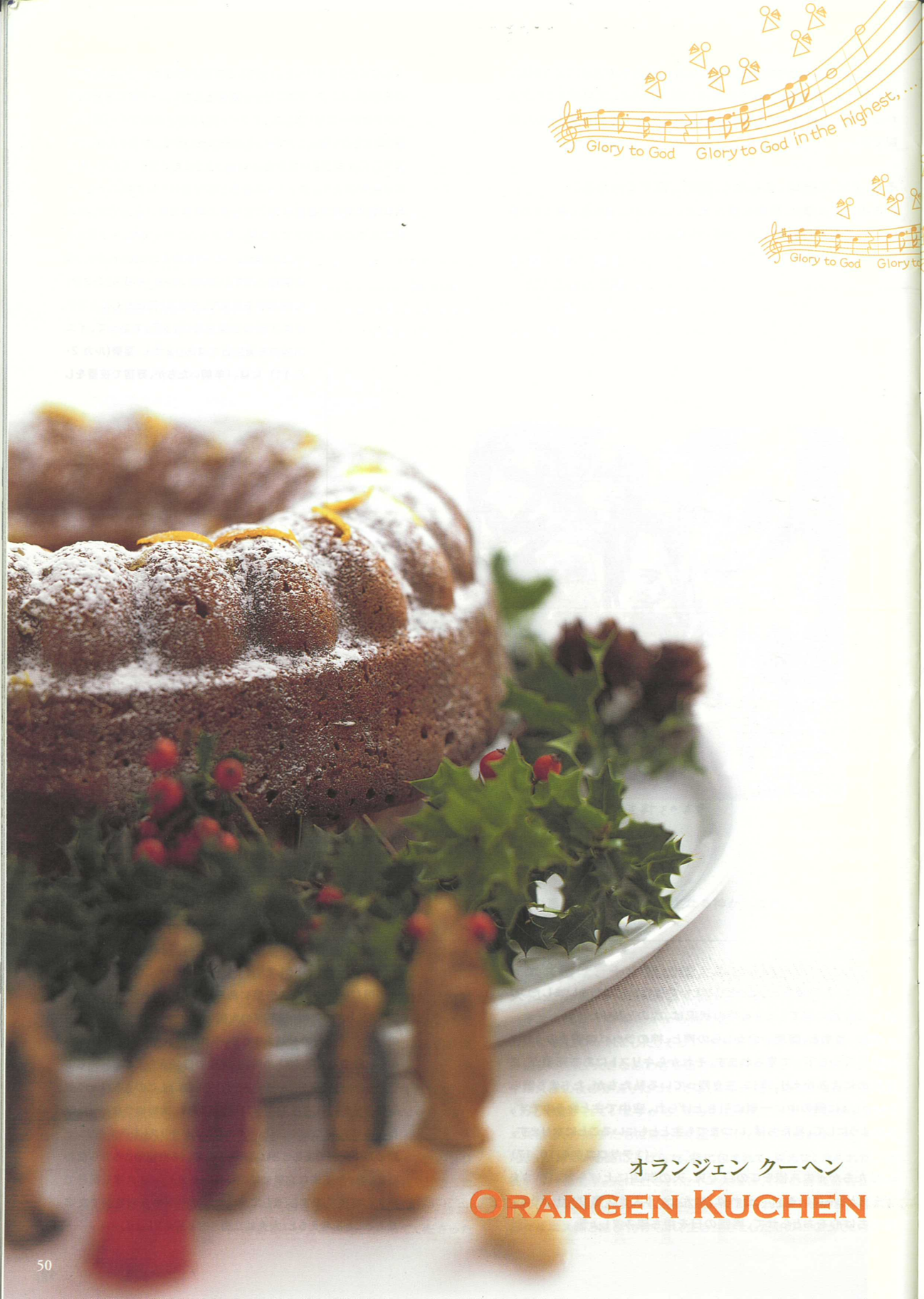
主は、号令と、御使いのかしらの声と、神のラッパの響きのうちに、ご自身天から下って来られます。それからキリストにある死者が、まず初めによみがえり、次に、生き残っている私たちが、たちまち彼らといっしょに雲の中に一挙に引き上げられ、空中で主と会うのです。このようにして、私たちは、いつまでも主とともにいることになります。
(1テサロニケ4･16, 17)

私たちがイエス様をこの目で見、天の御国に上げられ、「いつまでも主とともにいる」! それは、なんという大きな喜びでしょうか。私たちは心をおどらせて、再臨の日を待ち望みましょう。

＊ホワイトクリスマスという歌をご存知の方は多いでしょう。往年の名歌手、ビング･クロスビーが吹き込んだレコード盤は世界的なベストセラーになりました。ホワイトクリスマスのホワイト(白)は、言うまでもなく雪のことです。その歌のせいかもしれませんが、クリスマスには青空より雪景色が似合うように思えます。そして、私たちは当然のようにクリスマスを冬と結びつけています。しかし、それは中緯度以北の北半球に住む者の勝手な思い込みです。南半球の人々には、クリスマスは暑い夏のものだからです。＊クリスマス(Christmas)は、古英語のCristes maess(今の英語に直すとChrist mass :キリストのミサ)に由来する言葉で、キリスト降誕祭のことです。イエス様のお誕生を「祝う日」であって、イエス様のお誕生日ではありません。聖書(ルカ 2･8-11) には、「羊飼いたちが、野宿で夜番をしながら羊の群れを見守っていた」とき、「きょうダビデの町で、救い主がお生まれになりました」と知らされた、とあります。イスラエルの地で羊飼いが野宿した日が、真冬の12月25日とは考えにくい、もっと暖かい時季でないと野宿は無理でしょう。＊では、12月25日という日はどうして決まったのでしょうか。この日は古代ローマの暦(ユリウス暦)の冬至にあたります。この冬至の日を西暦275年、ときの皇帝が「不滅の太陽の誕生･顕現の祭」として、国の祭日に定めたのが始まりです。それを教会が「義の太陽(マラキ 4･2)であるキリストの降誕･顕現の日」ととらえて自分たちの祭にし、今日に至っています。ですから、「きよしこのよる」という聖歌はありますが、クリスマスは夜や星よりも、太陽につながった祭日なのです。＊なおXmasという表記は、Xがキリストを表すギリシャ語の第1文字であることに基づくもので、16世紀中ころから使われましたが、正式な文書には用いられません。イエス様を記号で表すのは失礼ですし、ましてXが未知数や謎の人物を表す文字であることを考えると、大失礼な書き方と言えましょう。

イエスがベツレヘムでお生まれになったとき、
見よ、東方の博士たちが
エルサレムにやって来て、こう言った。
「ユダヤ人の王としてお生まれになった方は
どこにおいでになりますか。
私たちは、東の方でその方の星を見たので、
拝みにまいりました。」 (マタイ2･2)

CHRISTMAS



オランジェン クーヘン

ORANGEN KUCHEN

シンプルで香ばしいクリスマスのお菓子

イエス様のご降誕をお祝いするクリスマスの食卓に、どんなケーキを出したらよいでしょうか。豪華なもの、スマートなもの、サイズや風味、費用や手間のことなどを考え合わせて、今回は「オランジェン・クーヘン」を選んでみました。オランジェはオレンジ、クーヘンはケーキのドイツ語ですから、日本語に訳せばオレンジケーキとなります。

名前の通りオレンジの風味を生かしたシンプルなケーキで、作り方もいたって簡単。多少のコツはありますが、焼いたケーキにオレンジ果汁をしみ込ませるだけで仕上がります。その上、どんな型でも作れるので、ケーキづくりの初心者に勧めたいお菓子です。

どこかへりくだった感じの、それでいて香ばしいところは、この世で質素な日常を過ごされたイエス様を偲ぶのにふさわしいケーキと言えましょう。



ビッキーのケーキづくり

材料

《すべて常温》

生地
- バター（有塩で良い）175g
- 砂糖　150g
- 卵（全卵）　3個
- オレンジの皮　1/2個
- レモンの皮　1/4個
- 小麦粉　175g
- コーンスターチ　25g
- ベーキングパウダー　小さじ1

果汁（しみ込ませる）
- オレンジの絞り汁　120cc
  - オレンジ 2個 程度
  - 市販のオレンジジュース
  - 100%果汁で代用しても良い
- レモンの絞り汁　1/2個
- オレンジの皮　1/2個
- レモンの皮　1/4個
- 砂糖　50g

- パウダーシュガー　適量

紙製のカップで作ってみました。



ラッピングして
プレゼントに
いかがですか？

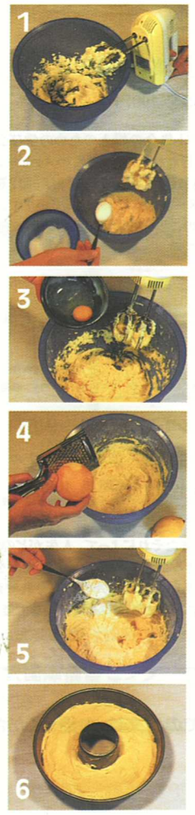
道具

型 … 今回は、21cmのリング型を使います。パウンド型でも、普通の丸い型でも良い。



型がなくても、こんな紙製のカップで作れます。

作り方



《下準備》
- a. 粉類は、合わせてふるいにかけておく
- b. 型にバターをぬっておく（紙の型の場合は不要）
- c. オーブンのスイッチを入れておく（180度 予熱）

《生地を作って焼く》
材料を順番に加え、泡立て器で良く混ぜていきます

1. 常温でやわらかくなったバターを泡立て器で練る
2. 砂糖を少しずつ入れ、良く混ぜる（5回くらいに分けて入れると良い）
   - ポイント：この段階でふっくら白っぽくなるまで丁寧に混ぜる
3. 卵を1個ずつ入れ混ぜる
4. オレンジの皮、レモンの皮をすりおろし入れる
5. ふるっておいた粉を3回くらいに分けて入れ粉が残らなくなるまで混ぜ合わせる
6. 生地を型に流し入れる 型に対しての生地の分量は6割ぐらいが適当（焼くと 生地がふくらむので）
7. 180℃で60分くらい焼く
   - ポイント：時間は、型やオーブンによって異なります 竹串をさして生地が付いてこなければ大丈夫

《果汁を準備》
焼いている間に、ケーキにしみ込ませる果汁を準備します



8. オレンジの皮、レモンの皮をすりおろす
9. オレンジとレモンの果汁を絞り、砂糖とすりおろした皮を加え混ぜる

《仕上げ》

10. 焼き上がったら素早く少量の果汁をかけて型から出す
    - ポイント：時間をおき過ぎると型からきれいに出せなくなるので注意



11. 上から果汁をスプーンで少しずつしみ込ませながらかける
12. 冷めてからパウダーシュガーをかけて出来上がり

ポイント：すぐに食べない場合は、パウダーシュガーをかけないで保存する 食べる前にかけると良い

